

# ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2025 [Vol.28]

Sep. 2025

# 本店移転のお知らせ

ギャラリーためなが東京店は、2025年9月より新たなアートの発信地として、展示スペースを従来の3倍に広げ、南青山・骨董通りに移転いたします。

当画廊は1969年、東京・銀座に近代絵画の巨匠から現代美術までを扱う画廊として誕生し、以来56年間日本中の美術館及び蒐集家に名品の数々を紹介してまいりました。1971年にパリと大阪に、2021年には京都に4店舗目の画廊を開きましたが、この度発祥の地銀座から新天地への移転となりましたことをご案内申し上げます。



## 東京店(本店)移転先

〒107-0062  
東京都港区南青山 6-5-39

- 東京メトロ「表参道駅」より徒歩 10分
- 都営バス「南青山七丁目駅」より徒歩 2分
- 都営バス「南青山六丁目駅」より徒歩 3分

## 業務開始日

2025年9月

※詳しい営業開始日はお手数ですが弊社WEBサイトをご確認ください。お問い合わせいただけましたら幸いです。電話番号、FAX番号に変更はございません

Eメール: gal@tamenaga.com  
電話/FAX: 03-3573-5368/5468

## 次回展覧会

9月21日(日)より現在当画廊で活躍する作家総勢20名による移転記念展覧会を開催いたします(詳細はWEBサイトにて公開予定)

## 株式会社 ギャラリー ためなが

東京 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-39  
TEL 03-3573-5368

大阪 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-1 ホテルニューオータニ大阪 1階  
TEL 06-6949-3434

京都 〒605-0991 京都市東山区上堀詰町 265-7  
TEL 075-532-3001

パリ 18, Avenue Matignon, 75008 Paris  
TEL 01-42-66-61-94

WEB [www.tamenaga.com](http://www.tamenaga.com)  
Email [gal@tamenaga.com](mailto:gal@tamenaga.com)



## CONTENTS

### ブロック報告 2024年10月~2025年4月

2	[北海道] 地域の美術に光を当てて 田村允英
4	[東北] コレクションの活用に注目して 佐々木蓉子
6	[関東] 美術館をめぐる二つの出来事 山下彩華
8	[東京] 円が安い、人が動く、作品は動かない 若山満大
10	[北信越] 北信越発、全国行! 金山 謡
12	[東海] 国民文化祭を契機とした展覧会の開催 立花 昭
14	[近畿] 町、山、展示室、そして美術館 渡辺亜由美
16	[中国] 中国地方の古代エジプトコレクションを巡って 渡邊祐子
18	[四国] 「合理的配慮」の実現を目指す美術館機能の拡充について 高見翔子
20	[九州] 表現の現場と地域をつなぐ場所 楠本智郎

### 新規正会員紹介

22	やないづ町立斎藤清美術館
23	公益財団法人ギャラリーエークウッド
24	豊島区立 熊谷守一美術館
25	軽井沢安東美術館
26	東御市梅野記念絵画館・ふれあい館
27	NISSHA印刷歴史館
28	佐賀大学美術館

目録などへの展示作品掲載(複製権)について 棚井文雄(日本写真著作権協会) 30

賛助会員各社 31

事務局から 32

専門委員会から 33

投稿要領 36

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 37

編集後記 38

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.28 2025年9月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

[編集] (一社)全国美術館会議広報委員会

[発行者] (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

[デザイン] 宮谷一孝 [印刷] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

## 地域の美術に光を当てて

田村允英(たむら まさひで・元 北海道立函館美術館)



2024年4月に働き方改革関連法が施行され、トラック事業においても時間外労働の上限規制等が適用された。この規制は「物流の2024年問題」と呼ばれ、美術館業界にも深刻な影響を与えたことが予想される。特に、本州と海を隔てた北海道では、年々削減される予算状況も重なり、作品の長距離輸送を見込んだ展示計画を立てにくくなっているのが現状だ。

こうした状況下、道内各館では以前にも増して、これまで見過ごされてきた優れた地域美術に焦点を当てた展覧会が開催されるようになってきていると感じる。

手前味噌となるが、筆者の勤務した北海道立函館美術館主催の「生誕260年 蠣崎波響と松前の至宝」展(10月13日～12月8日)を紹介したい。1991年に蠣崎波響の大規模巡回展が開催されてから30年余り、研究は大幅に進展し、故郷・松前町にも80点を超える作品が里帰りしている。同展では、松前町教育委員会が所蔵する波響及びその関連作品を中心に、初期から晩年までの画業を概観。加えて、詩歌をよくし、同時代の名だたる文人とも交友した波響が狂歌絵本の図様から発想を得たであろう作品もあわせて紹介した。今話題の大河ドラマ「べらぼう」ではないが、文芸・出版業界とのつながりをも示せ、今後の波響研究に向けられるべき新たな視点も提示する機会となっただろう。

同時期、市立函館博物館でも「函博コレクション HAKYO 蠣崎波響展」(10月23日～2025年6

月22日)が開催され、秋口の函館は波響一色に染まっていたと言えるかもしれない。欲を言えば、函館市の高龍寺が所蔵する約120年ぶりに修復された《釈迦涅槃図》の御開帳(4月1日～15日)と公開時期を合わせられれば、道南の波響の名作をまとめて鑑賞する機会とできたであろうことが惜まれる。

函館から特急で1時間ほどの距離に位置する八雲町に目を向けると、同地で発祥100年を迎えた木彫り熊の展示が好調だ。開館10周年を迎えた八雲町木彫り熊資料館の常設展示では、迫力あふれる木彫り熊だけでなく、木彫り熊のルーツも知れ、各地から収集した民芸品とも出会う。特別展「イッピン! 八雲の木彫り熊」(2024年6月15日～9月29日)では、毛並みまで具象的に表現した「毛彫り」を得意とする日本画家でもある十倉金之、大胆に切り落としたカット面による抽象的な構成を得意とした柴崎重行による逸品のほか、スキーや楽器演奏に興じるコミカルなミニチュア熊など、個性豊かな表情を見せる67点の木彫り熊が展示され、筆者も今なお続く人気の源泉に思いをはせた。

このほか、特別展「ジョバン木彫展～スイスにおける約100年前の木彫品～」(10月8日～12月22日)では、木彫り熊100周年を記念してスイスの制作工房・ジョバン社から寄贈された関連資料が展示され、国際的な視点からも八雲の木彫り熊という郷土芸術のルーツを探る地道な調査研究活動の成果が結実していたことも付記する。

最後に、地域とのつながりという視点から、道央圏の現代美術展の開催状況にも触れておきたい。

北海道立三岸好太郎美術館では、道内で活躍する40歳以下の新鋭若手作家を紹介する「mima-no-me #みまのめ VOL. 10」(12月14日～2月24日)を開催。同展は今年で10年目になるシリーズ企画である。本年は版画・油彩画・インスタレーションのジャンルから、現役高校生を含むみずみずしい感性を湛えた4名の作家の作品が展示室の中で響き合った。これまでのべ40名の新進作家を紹介・支援してきたことになる本事業は、これから現代の北海道美術史をつむぐ一助となることだろう。

北海道立近代美術館で開催された「星の瞬間」展(1月5日～3月16日)は、学芸員と現代作家による同館コレクションの読み直しを図る意欲的な展覧会であった。選出された作品は幕末の函館焼から、現役作家・藤戸康平の立体まで時代もジャンルも異なる北海道美術の多様性を提示しうるラインナップとなったことは偶然だろうか。なかには、現在ほとんど忘れかけられた木路毛五郎のように、

道内美術評論史を語る上で欠かせない作家にも光が当てられるなど、本展が新たな北海道美術史を提示する一歩となりえたことは疑いえない。一方、同展が美術館コレクションの読み直しという視点に立つならば、参加した現代作家たちの表現について、作者のことは提示するだけでなく美術館サイドから作家の評価・位置付けを示してもよかつたのではないかと感じた。

若干の批判は加えたものの、こうした着実な作家・作品研究に基づく展覧会が企画されることにより、北海道美術史の新たな1ページが築かれる事は間違いない。長距離輸送が困難になろうとも美術館の展覧会活動は続く。遠方を見ずとも身近にある光り輝く原石に目を向け、その魅力を発信していく作業を担うことも学芸員に求められる資質ではないかと感じる1年であった。

2024年度限りで北海道を離れ、和歌山県の美術館に転職する筆者ではあるが、他地域にはない独自の美術文化の発信がこれからも続くことを大いに期待している。



八雲町木彫り熊資料館 常設展示 会場風景 (筆者撮影)



「星の瞬間」展 会場風景 (筆者撮影)

## コレクションの活用に注目して

佐々木蓉子(ささき ようこ・弘前れんが倉庫美術館)

本報告では、青森県内の展覧会について、とくに、コレクション作品と、企画展との有機的な接続が試みられている現代美術館3館の事例に注目したい。

青森県立美術館のコレクション展は、毎回、企画展のテーマとも有機的に結びついている。2025年度第1期のコレクション展(4月19日～7月13日)も、企画展「描く人、安彦良和展」(4月19日～6月29日)との関連を踏まえて構成されていた。漫画家/アニメーション監督の安彦良和(1947-)は、弘前大学に進学し、学生運動に参加した経験を持つ。青森の地は、安彦の社会へのまなざしを育んだ「原点」の地としても位置付けられている。コレクション展では、「空想のゲリラたち」と題して、安彦が学生運動に関わった1960年代の作品群がとりあげられた。澤田教一(1936-1970)によるベトナム戦争写真や、成田亨(1929-2002)の特撮美術など、戦後日本の社会を映し出す鏡のような創作を行った青森ゆかりの作家たちの作品が紹介されていた。奈良美智(1959-)の展示室では、安彦展のタイトル「描く人」に呼応するように「作る人、奈良美智」とテーマが掲げられていた。多様な奈良作品の中でも、素材の複雑な質感が伝わる、木炭でのドローイングや、制作過程での身体の動きの跡が残る大型彫刻などが選定されていた。この奈良の展示室でのテーマに触発され、その後、一見すると迷いなき簡潔な線で仕上げられている安彦のアニメーション

のラフ画の紙面を眺めているとき、ときに描いては消しながらより良い線が探られた痕跡に意識が向かった。作品と向き合う際の自分自身の感覚がひらかれていくような体験であった。

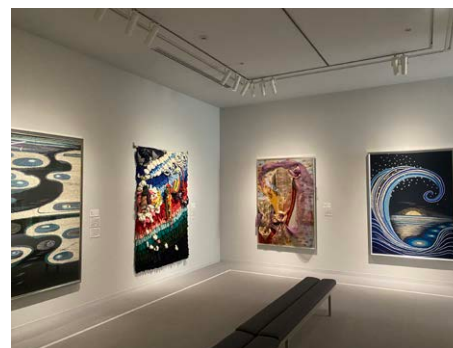
八戸市美術館では、コレクション展示を「美術館における実験室のような存在」と位置付け、シリーズ「コレクションラボ」を展開している。「コレクションラボ009 リビングルーム」展(11月2日～2月24日)では、工藤甲人(1915-2011)や豊島弘尚(1933-2013)ら、八戸や青森ゆかりの作家を中心に作品が紹介されていた。来館者は、椅子やソファに腰掛けながらくつろいで鑑賞することができ、作品との距離を縮める工夫が散りばめられていた。続く「コレクションラボ010 西野こよ 表現への挑戦」展(3月1日～6月15日)では、八戸市を含む青森県南部地方に伝わる刺し子の技法「南部菱刺し」を用いた制作を行った作家、西野こよ(1931-2019)が特集された。南部菱刺しは、布の偶数目を数えて刺し、横長の菱形模様が見られることが特徴である。一方で、西野の作品は、菱刺しの基本を踏まえつつも、奥入瀬溪流の風景を描いた具象的な作品や、布地に、刺し子糸や刺繍糸を束のままくりつけたものなど、新たな表現に挑戦する有り様が強く見られるものも多く紹介されていた。地域の伝統工芸の技法的な側面だけではなく、作り手の作家としての制作姿勢に注目した展示構成が印象的であった。

十和田市現代美術館は、展示室にくわえ、美

術館近くの商店街など市民の生活の中にコレクションを蓄積している。2025年4月には、オーストリア生まれの作家、エルヴィン・ヴルム(1954-)の個展が開幕した(4月12日～11月16日)。ヴルムは同館コレクション作家のひとりであり、彫刻作品《ファット・ハウス》《ファット・カー》(ともに2010年制作)を美術館前のアート広場に常設展示している。企画展では、教育制度への問題意識をテーマに、オーストリアの学校の校舎を模した建物を細長く造形し、中に入ると強い歪みを感じるインスタレーション《学校》をはじめ、写真や衣服など異なる素材と技法を用いて、彫刻表現が探求されていた。再認識したのは、ヴルムの作品空間を出入りすることで体験できる、圧迫

感を感じるような身体性や、作品の表と裏を裏返すような要素の面白さである。こうした感覚を得て、外の《ファット・ハウス》に再び立ち寄り、内部に数年ぶりに足を踏み入れた。十和田を訪れるたびに馴染みのこの作品と、新たな視点で出会いたいとおすことができた。

勤務先である弘前れんが倉庫美術館は、開館から今年で5周年を迎えた。コミッションワークを軸としつつ、弘前や東北地域の歴史、文化と向き合う現代の作家の作品を中心に、開館から少しずつコレクション形成に取り組んできた。今後は他館の事例からより積極的に学び、情報交換をさせていただきつつ、コレクションの活用のある方を探っていきたい。



八戸市美術館「コレクションラボ010 西野こよ 表現への挑戦」展  
会場風景



エルヴィン・ヴルム《ファット・ハウス》2010年 十和田市現代美術館蔵  
撮影：小山田邦哉

## 美術館をめぐる二つの出来事

— DIC 川村記念美術館の閉館と  
「飯田善國展—色は光、光はことば」

山下彩華 (やました あやか・千葉市美術館)



2024年秋から2025年春にかけての関東ブロックの美術館をめぐる話題の中で、まず触れておきたいのは、千葉県佐倉市にあるDIC川村記念美術館の閉館である。2024年夏に届いたその報せでは2025年1月末での閉館が予定されていたが、来館者の急増を受けて閉館時期が3月末まで延長されることとなった。自然豊かな環境に佇む同館は、西洋近代美術から20世紀後半のアメリカ美術まで幅広いジャンルを網羅するコレクションで知られ、国内外の美術愛好者から親しまれてきた。特に、1990年の開館以来、現代美術作品の積極的な収集と、それを活かした意欲的な展覧会によって、日本における現代美術受容の流れの中に確かな足跡を残してきた。そうした美術館の閉館は、多くの人々にとって大きな驚きと喪失感をもたらしたことと思う。

駅からの送迎シャトルバスが停車する美術館のバス停の前には、飯田善國の《動くコスモス》(1968年)が設置されており、バス利用の来館者がおそらく最初に出会う作品である。彫刻家・飯田善國(1923-2006)は、大日本インキ化学工業(現DIC株式会社)2代目社長であり同館の初代館長を務めた川村勝巳氏の遠縁にあたり、同館の現代美術コレクションの形成に大きく貢献した人物でもある。飯田の協力によって、フランク・ステラやモーリス・ルイスといった作家の作品が早い時期から蒐集され、コレクションの骨格が築かれていった。

その飯田の回顧展が、ちょうど2024年11月か

ら12月にかけて、彼の出身地である栃木県の足利市立美術館で開催された。この展覧会は、彫刻家・飯田善國の創作を支えた詩的な発想とその実践を明らかにし、いかに彫刻や絵画作品へと展開していったのかを、初期から晩年にいたるまで丁寧に顕彰したものである。印象派やフォーヴィスムの影響をうかがわせる重厚な初期の油彩作品に始まり、ローマ留学以降に展開していく版画作品や、木や金属を用いた彫刻作品からは、表現者としての多才さが存分に感じられた。さらに、作家にとっての詩作という行為が創作活動の根幹をなすという一貫した視点によって構成された展示は、多層的かつ立体的に作家像を浮かび上がらせた。地元出身の作家を継続的に取り上げてきた足利市立美術館の姿勢と相まって、堅実な顕彰活動として印象深いものであった。

なお、本展は、2023年に迎えた飯田善國の生誕100年を記念して企画されたオープン・プロジェクト「IIDA101」の一環として開催された。このプロジェクトは複数の美術館が連携し、1年を通して各館が飯田の作品に焦点を当てた展示を行うというものだった。参加した美術館は次の通りである。神奈川県立近代美術館鎌倉別館(「イメージと記号1960年代の美術を読みなめす」展)に出品、2023年12月9日～2024年2月12日)、目黒区美術館(「IIDA 101 飯田善國」展、2024年2月17日～3月24日)、TRIAD IIDA KAN(「101年目からの飯田善國—原点の油彩画」展、2024年5

月16日～11月24日)、慶應義塾大学アート・センター(「アート・アーカイヴ資料展 XXVI 飯田善國—時間の風景」、2024年5月27日～7月26日)、町田市立国際版画美術館(「飯田善國の版画と《彫刻噴水・シーソー》」展、2024年5月29日～9月1日)、そして足利市立美術館(「飯田善國展—色は光、光はことば」、2024年11月16日～12月26日)である。このプロジェクトは、各地に点在した作家の作品を集荷して巡回するという従来の回顧展とは異なり、各館がそれぞれの所蔵品や資料を中心に独自の視点で構成するという形式をとっている。美術館同士のゆるやかな連携を維持しつつ、輸送や展示の負担を軽減しながら、多角的に作家像を描き出すという点においても、きわめて意義深い試みであったと感じる。

DIC川村記念美術館では、閉館時期が延長された2ヶ月間で、約180点の主要なコレクション作品を展示する「DIC川村記念美術館1990-2025 作品、建築、自然」展(2月8日～3月31日)

が開催された。足利市立美術館での飯田善國の回顧展を通して浮かび上がった、詩作と造形を行き来する思考の深さや、その中で培われた審美眼と国際的な視野が、DIC川村記念美術館のコレクションの形成の背景にあったことを想像すると、同館のコレクションもまた一つ新たな光を帯びる。また、建築や展示空間の設計にも改めて意識が向けられ、35年という年月の積み重ねと、それを支えた関係者の熱意や美術への愛情の深さが伝わってくる展覧会であった。

足利市立美術館での展示では地元作家の丁寧な顕彰活動の重要性を強く感じ、その点について触れようと書き進めていたところ、DIC川村記念美術館閉館の報せに接し、この二つの展示が自然とつながっていった。私にとっては、美術館の存続、独自のコレクションの形成とその重要性、美術館連携の在り方などを改めて考える機会にもなった。今後も折に触れて思い出し、考え続けることだろう。



3月末に訪れたDIC川村記念美術館。閉館前から長蛇の列が続いている。



足利市立美術館「飯田善國展—色は光、光はことば」会場風景 (提供：足利市立美術館)

## 円が安い、人が動く、作品は動かない

若山満大(わかやま みつひろ・東京ステーションギャラリー)



国立西洋美術館で開催された「モネ 睡蓮のとき」展(10月5日～2月11日)は、入場者数80万人超という盛況を見せ、同館歴代4位の記録となった。しかし、数字以上に驚かされたのは、上野公園の一角を埋め尽くす来館者の大行列である。閉幕が近づいた2月、日本人の老若男女に加え、春節休暇で来日した中国人旅行者をはじめとする訪日外国人の姿も多く見られ、前庭に収まりきれない行列が敷地外にまで延々と続いていた。この凄まじい現場で、連日來館者を誘導するスタッフの疲弊ぶりは想像に難くない。ある輸送業者が「ここ最近、何度も上野に図録を納品に行っている」と話していたことを思い出す。同じ頃、当館でも異様なほど図録が売れた。2024年冬以降、個人消費は持ち直し傾向にあるとされている。官公庁やJTBの統計でも、国内旅行者数と旅行消費額の増加が確認されており、この傾向は今年も続く見込まれている。また、日本政府観光局(JNTO)の発表によれば、2025年1月の訪日外客数は単月で過去最高を更新し、2月・3月も同月の最高記録を更新したという。つまり、都内の人流はコロナ禍からの回復期をとうに過ぎ、訪日外国人旅行者を巻き込みながら増加に転じている。驚異的な入場者数や図録の売れ行きは、こうした動向を裏付けているのだろう。

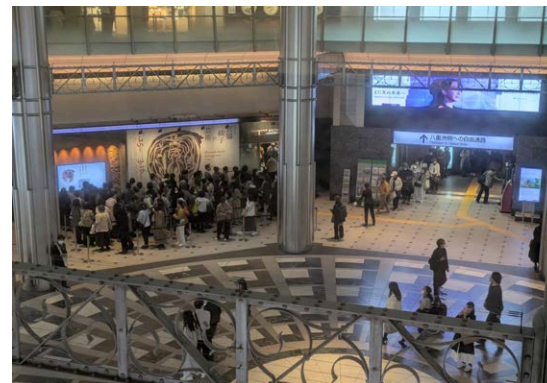
2024年冬頃には、森美術館「ルイズ・ブルジョワ：地獄から帰ってきたところ 言っとくけど、素晴らしかったわ」展(9月25日～1月19日)、東

京都現代美術館「坂本龍一|音を視る 時を聴く」展(12月21日～3月30日)の二つの現代美術展が話題となった。2025年春にかけては、前述の西洋美術館「モネ」展をはじめ、バナソニック汐留美術館「ル・コルビュジェ 諸芸術の総合 1930-1965」展(1月11日～3月23日)、東京都美術館「ミロ」展(3月1日～7月6日)、三菱一号館美術館「異端の奇才ーピエアズリー」展(2月15日～5月11日)など、モダンマスターズの個展が相次いで華々しく開幕した。また、アーティゾン美術館の「ゾフィー・トイバー=アルプとジャン・アルプ」展(3月1日～6月1日)、東京国立近代美術館「ヒルマ・アフ・クリント」展(3月4日～6月15日)は、近代美術における女性作家の顕彰という点で特筆すべき企画だった。一方で、海外機関との協同や国際輸送が必要な展覧会の開催は、近年いっそうハードルが上がっている。大規模な施工や広範囲におよぶ作品輸送を要する展覧会も同様である。こうした状況を象徴する出来事の一つが、国立新美術館によるクラウドファンディング(以下CF、実施期間2024年11月～2025年1月)である。このCFは同館の「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」展(3月19日～6月30日)開催に際し、輸送費や資材費の高騰に伴う資金不足を補うために実施された。結果として、目標金額1000万円を上回る支援が集まり、その資金は当初の予定どおりミス・ファン・デル・ローエによる未完のプロジェクト「ロー・ハウス」の再現展示に

充てられた。加えて、この展示は観覧無料とされ、支援の成果は多くの来館者に還元されている。良好な結果に見えるが、一方で「制度的問題の先送り」「再現性・持続可能性への懸念」「資金難の公表による信用低下」といった課題や批判もある。しかし、文化事業の問題を広く社会に周知し、美術館へのオーナーシップを育む契機にもなり、何より当座の不足資金を調達し得るCFに一定の有用性があるのも事実である。現場では様々な議論があったと想像される。

とかく作品を動かすのが困難な昨今、制約の中で独自性や魅力を備えた企画を立案することは、多くの美術館に共通する課題だろう。国宝を前面に押し出すストロングスタイルの「黒の奇跡・曜変天目の秘密」展(静嘉堂文庫美術館、4月5日～6月22日)と、継続的な顕彰で着実に知名度を高めてきた「ライトアップ木島櫻谷IIーおうこくの線をさがしに 併設四季連作屏風」展(泉屋博古館東京、4月5日～5月18日)は企画の方向性を異

なるものの、自館のコレクションを強く打ち出す姿勢は共通している。江戸絵画と「ひらがな形容詞」のプロモーションが浸透してきた府中市美術館も「春の江戸絵画まつり 司馬江漢と亜欧堂田善 かつこいひい油絵」展(3月15日～5月11日)で今年もブランディングの継続に努めている。また、「オタケ・インパクト 越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」展(泉屋博古館東京、10月19日～12月15日)、「ハニワと土偶の近代」展(東京国立近代美術館、10月1日～12月22日)など、タイトルを聞くだけで興味をそそる充実の好企画もあった。自館の個性や強みを最大限に訴求すること、継続的な取り組みでブランド(価値)を作り上げていくこと、斬新なアイデアで興味を惹き企画の深度で納得させること。予算や収益を諦めないのと同じく、こうした努力も諦めたくないものである。各館の取り組みに学びながら、筆者も自館の運営に活かしていきたいと思う。



東京ステーションギャラリー「宮崎綾子の芸術 見た、切った、貼った」展にて、駅構内に伸びた来館者の長い列は、半日近く途切れることがなかった。

## 北信越発、全国行!

金山 謡(かなやま よう・富山県水墨美術館)



どの地域にも、その土地出身あるいは縁の深い作家がいて、彼らについての調査研究活動は該当地域所属の美術館の使命とされる。しかし、名の知れた有名作家や繰り返し個展が開催されてきた人気作家ならともかく、画壇の勢力争いに圧され美術史の表舞台から名前を消した作家や、そもそも最初から中央画壇を主戦場とはせず我が道を貫いたタイプの作家などは、地方美術館によるローカル規模の発信だけでは全国的な再評価へ結びつけることはきわめて難しい。しかし近年、そのようないわゆるご当地作家たちの展覧会が首都圏や大都市で続々と開催されており、彼らの再評価や全国進出の契機となりつつある。そこで少し異例だが、2024年中に都市圏で開催された北信越出身作家の回顧展を振り返ってみようと思う。筆者の属する富山に関連する作家の話が多くなるが、ご容赦願いたい。

まずは、六本木の泉屋博古館東京にて開催された特別展「オタケ・インパクト 越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」(10月19日～12月15日)である。新潟出身で、はじめは富山で売薬版画や新聞挿絵などを手掛けたこともある尾竹越堂・竹坡・国観の日本画家三兄弟を紹介する、東京で初めてどころか全国的に見ても過去最大規模といえる、画期的な企画展であった。おもに文展を舞台に活躍し、竹坡と国観は入賞を重ね一時は三兄弟揃って入選するなど展覧会の申し子として高い評価を得ていた彼らだが、画壇の権

力者との衝突などが原因で美術史の本流で語られる機会に恵まれなくなっていた。彼らのゆかりの地である新潟や富山ではこれまで、新潟県立近代美術館はコレクションを中心に継続して尾竹三兄弟を紹介してきたし、富山県水墨美術館でも「生誕140年 尾竹竹坡展」(2018年)を開催しているが、やはり東京での開催の反響は大きく、かなりの知名度アップにつながったように感じている。

続いては、京都府京都文化博物館はじめ全国4会場を巡回した特別展「生誕140年記念 石崎光瑠」(京都会場:9月14日～11月10日)。富山県出身で京都画壇において活躍した日本画家、石崎光瑠の画業をたどる、こちらも富山県外では初めてとなる大規模回顧展であった。南砺市立福光美術館(富山)には質・量ともに随一の光瑠作品コレクションがあり、常設展示には「石崎光瑠展示室」も設けられているが、富山駅からも金沢駅からも距離があり立地的にやや弱く、全国的な発信までには結び付いていなかったように思える。しかし今回の光瑠展は、国内外から年間通じて多数の観光客が訪れる日本トップクラスの観光地である京都が巡回の第二会場であり、福光美術館所蔵の作品を中心とした光瑠作品を非常に多くの方にご覧いただく機会に恵まれた。また地元富山でも、郷土作家として見慣れた印象を持っていたが巡回第一会場の福光美術館を訪れこんなにすごい画家だったのかと衝撃を受けた、という県民からの投書が地元紙で紹介されるなど、地元での

再評価にも繋がったようにも思えた。

そして少し遡るが、昨春には練馬区立美術館と長野県立美術館の巡回企画展として「生誕150年 池上秀敏 高精細画人」展(東京会場:2024年3月16日～4月21日)が開催された。時期をあわせて長野県伊那文化会館でも秀敏展を開催している。横山大観や菱田春草ら日本画の「新派」とよばれた作家たちが全国各地で数々の回顧展が開催されるほどの人気と知名度を博してきたのに対し、秀敏ら「旧派」の作家たちはその呼称からか古臭く保守的な印象が先行し、近年まで展覧会に取り上げられることは少なかった。本展はそのような旧派の作家の中から、長野出身の池上秀敏にフォーカスする試みであった。序章(プロローグ)では秀敏と同じく長野出身だが新派の日本画家、菱田春草作品との比較展示もあり、彼らの画風および絵に対するスタンスの違いを体感することもできた。関係の方から聞いたわけではないが、展覧会情報サイトなどの来場者の口コミを見る限り

でも池上秀敏の名前を初めて聞いたのが良かったという好意的なコメントが多く見られ、秀敏の認知度アップに非常に良い影響を及ぼしたようだ。

ここまでいくつか展覧会を振り返ってみた。筆者のリサーチ不足および紙幅の関係上ご紹介から漏れてしまった展覧会もあるかもしれないが、このところ相次いで北信越出身作家の企画展が都市部の美術館で大々的に開催されたことは非常に誇らしい。地方での取り組みだけでは届けられなかった全国の人たちにその作家の魅力を知ってもらいきっかけになるだけでなく、地元での再評価にも繋がる。これは、地方で粘り強く紹介されてきた作家の中に新しさを見出して華々しくプロデュースしてくださる都市部の意欲的な学芸員の皆様のおかげでもある。我々地方美術館の学芸員はそんなバイタリティ溢れる皆様から刺激を受けつつ、改めて地元作家の顕彰に今後も励んでいこうと思うのである。



泉屋博古館東京 特別展「オタケ・インパクト 越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」会場風景 (写真提供: 泉屋博古館東京)



京都府京都文化博物館 特別展「生誕140年記念 石崎光瑠」会場風景 (写真提供: 京都府京都文化博物館)

## 国民文化祭を契機とした展覧会の開催

立花 昭(たちばな あきら・岐阜県現代陶芸美術館)



岐阜県では2024年10月14日から11月24日まで、「第39回国民文化祭、第24回全国障害者芸術・文化祭『清流の国ぎふ』文化祭2024」とともに・つなぐ・みらいへ～清流文化の創造～が開催された。県内各所で様々な文化事業が展開されるなか、それぞれの美術館では趣向を凝らした展覧会や魅力的なイベントが数多く催されていた。とくに展覧会に絞れば、岐阜県美術館(岐阜市)の「PARALLEL MODE:山本芳翠-多彩なるヴィジュアル・イメージ-」展、「PARALLEL MODE:オディロン・ルドン-光の夢、影の輝き-」展(ともに9月27日～12月8日)が出色的内容だったといえよう。これらは個別に企画された特別展でありながら、展覧会名の共通する冠からも分かる通り、意図的に会期を重ねたものである。しかも、同館におけるコレクションを象徴する芳翠とルドンの二人の画家を取りあげた、極めて挑戦的な試みでもあった。

山本芳翠(1850-1906)は、現在の岐阜県恵那市明智町に生まれ、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、フランスと日本を舞台に活躍した洋画家である。本展はおよそ30年ぶりの回顧展となり、140年の時を経て公開された《白勢和一郎の肖像(部分)》を含む、初期から晩年までの代表作約220点が所狭しと展示されていた。一方のオディロン・ルドン(1840-1916)は、フランス・ボルドーに生まれた19世紀末から20世紀初頭を代表する画家である。開館以来同館が収集してきたル

ドン・コレクションの全貌を公開し、それらをベースに330点超を一堂で紹介する圧巻の大回顧展となった。国民文化祭という機会を捉え、満を持して開催されたというべき展覧会であった。

岐阜県現代陶芸美術館(多治見市)では、この期間にあわせて「生誕130年 荒川豊蔵展」(9月14日～11月17日)をメインに、「美濃のラーメンどんぶり展」「Way of Earth / A föld útjai」展(ともに10月18日～11月17日)と、多彩なラインナップで繰り広げられた。

荒川豊蔵(1894-1985)は、岐阜県多治見市出身で近代日本の陶芸界をリードし、「志野」「瀬戸黒」の人間国宝としても著名である。会場では陶芸作品だけでなく、自身で筆を執った書画などもみられた。また「ラーメンどんぶり展」は、美濃でおよそ90%生産されているこの器を広く知らしめようという趣旨である。グラフィックデザイナーの佐藤卓をディレクターに迎え、地元団体とともに企画されたもので、多様なラーメンどんぶりが、様々な切り口によって並ぶ異色の構成となっていた。一方、このような地域性を強調した内容に対し、「Way of Earth」展はハンガリーと岐阜の陶芸作家を取り上げた交流展だった。

上記の展覧会については、地元を中心として3年に1度開催され、世界的な陶磁器のコンペティションとして広く知られる国際陶磁器フェスティバル美濃(10月18日～11月17日)の開催とも密接に結びついていた。国民文化祭、そして国際陶

磁器フェスティバルとの連携により、地域への周知はもちろん、世界に向けての発信力強化も図っていたとみてよい。

ほかにも、中山道広重美術館(恵那市)では「浮世絵おじさんフェスティバル」展(10月3日～12月8日)がおこなわれた。浮世絵に登場する味わい深くも名もなき人々に対し、親しみを込めて「おじさん」と呼び、新たな魅力や着眼点を提案するというユニークな内容であった。このように好機を捉えた複数の催しが当該期間において、県内各地で開催されていたのである。

ここからは主題から少し離れて、2024年度下半期にブロック内で開催され、とくに印象深かった展覧会について幾つか言及していきたい。

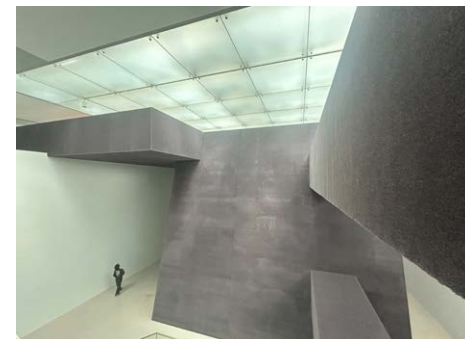
愛知県内では、豊田市美術館の「玉山拓郎:FLOOR」展(1月18日～5月18日)は、とりわけ心に問いかけるものだった。玉山拓郎(1990-)は岐阜県多治見市出身で、立体的な造形や光、映像、音を組み合わせたインスタレーションを展開する作家である。ただし、本展では一つのインスタレーションが美術館の複数の展示室を貫通してい

るように配され、日の光による移ろいのなか、否応なく作品とその空間を意識させられた。愛知県美術館(名古屋市)の「パウル・クレー展 創造をめぐる星座」(1月18日～3月16日)は、同時代の芸術家たちとの交流や歴史の流れを参照しながら捉え直したものである。東海ブロック内では、さらに静岡市美術館(2025年6月7日～8月3日)にも巡回した。

三重県立美術館(津市)では、「知っておきたい三重県の江戸絵画」展(10月12日～12月1日)という教育的な展示がおこなわれた。ひととき強烈な個性を放つ奇想の絵師・曾我蕭白(1730-1781)をはじめ、月僊(1741-1809)、増山雪斎(1754-1819)を三者三様に紹介したものである。また、パルミタミュージアム(三重郡)では、岡田文化財団設立45周年記念の一環として、「小川晴暘と飛鳥園100年の旅」展(11月30日～1月26日)が開催された。写真家である小川晴暘(1894-1960)が創立し、2022年に創立100年を迎えた仏像写真専門の写真館「飛鳥園」の歩みを紹介したものであった。



岐阜県美術館「PARALLEL MODE:山本芳翠-多彩なるヴィジュアル・イメージ-」展 会場風景



豊田市美術館「玉山拓郎:FLOOR」展 会場風景

## 町、山、展示室、そして美術館

渡辺亜由美(わたなべ あゆみ・京都国立近代美術館)



2024年10月から2025年4月にかけての報告ということで、カメラロールを見返し記憶を紐解いてみると、この期間も関西のアートシーンは元気だった。

まず紹介したいのは、町の中の展示会である。秋の京都では各種アートフェアの開催に合わせて、ボスコ・ソディと加藤泉の二人展「黙: Speaking in Silence — Bosco Sodi & Izumi Kato」(両足院、11月2日～17日)、大徳寺黄梅院のルーカス・アルダの個展「At Twilight」(10月31日～11月7日)、そして曼殊院での何翔宇(ヘ・シャンユ)の個展「The Memory of Stillness」展(10月19日～11月17日)など、寺院での展示が数多く行われた。京都を舞台にしたマーケティングでもあるこれらの企画には複雑な思いも抱いてしまいが、それでも作品と共に歴史的建造物や文化財に触れることができる貴重な機会であることに違いなく、静かな美しい環境で作品に向き合うことができた。大阪では、閉館した茨木市福祉文化会館等で行われた「Funny bone と移動する日常」展(10月26日～11月17日)、そしてアートプロジェクト「水門(みなと)」による梅田哲也個展(3月20日～31日)が興味深かった。前者はアートユニット Barrack が企画した若手から中堅作家たちのグループ展で、会場からエネルギーが拡散していくような勢いがあった。他方、下町にある作家のアトリエを公開する場でもあった後者は、建物とそこに置かれるもの全てが生き物のように息づき、梅

田の創作の源泉へと潜っていくような体験を差し出した。

町から山へ移動すると、共同スタジオ山中suplexが主催する「シェアミーティング2 つぎつぎに(あつまっては)なりゆくいきほひ」(3月22、23日)が行われていた。残念ながら現地へ行くことは叶わなかったが、今回は国内各地と、タイ、そしてインドネシアからオルタナティブスペースなどを運営する7組が集い、各自のプラットフォームや活動を持続させるノウハウを共有する場になったと聞く。こうした実践者同士の創造的な交流が比叡山の一角で行われたことにも、関西アートシーンの活発さが表れている。

次にギャラリーやアートスペースを含む展示室での活動に目を向けると、美術館のコレクション展を含めて「女性」をテーマにした企画が数多く開催された。実見できた中で印象的だったのは、インターセクショナル리티の視点を交えてジェンダー、中東、ヒロシマを扱った井上裕加里による展覧会「JIN, JIYAN, AZADĪ 女性、命、自由」(A-LAB、2月1日～3月30日)、そして赤松玉女退任記念展「Ladies — これでおしまい、そしてこれから」(京都市立芸術大学内、3月20日～30日)という、両作家の個展である。赤松の退任記念展は作家としての歩みを丹念に追うことができる充実した内容で、普段いかに誰かを社会的な肩書だけで見ているのか思い知らされた。男性作家の個展としては、現在から過去へと遡る展示構

成を取った「今井祝雄—長い未来をひきつれて」(芦屋市立美術博物館、9月14日～11月17日)は、現在も続く作家の創作に一つの道筋を通すものだった。

各地で刺激的な企画や実践が行われる中、兵庫県立美術館の「阪神・淡路大震災30年 あれから30年—県美コレクションの半世紀」(1月7日～4月6日)は、美術館という場所が担うべき役割について改めて思いを馳せる時間を与えてくれた。震災を機に作家たちが制作した作品の数々にも胸を打たれたが、特に感銘を受けたのは震災で破損した作品の記録や、その後の修復過程を紹介したコーナーである。美術館の活動は、大半が展覧会以外の地道で細々とした仕事の中にあるが、そうした可視化されにくい取り組みに光を当てる一つの方法もまた展覧会である。本展は震災を体験した同館が、地域の美術館としてすべきことを考え向き合った歩みを伝える、意義深い展覧会だった。

最後に、大阪市立美術館のリニューアルオープン記念特別展「What's New! 大阪市立美術館名品珍品大公開!!」(3月1日～30日)を紹介したい。本展は約2年半の休館を経て再開館した同

館のコレクション展である。面白かったのは、作品に時折「名品」または「珍品」というラベルが付されていたことだ。「珍品」の中には、ガラスケースの新設により展示が叶った大型作品も含まれていて、キャプションには「ようやく展示できた～!」と書いてあった。私事で恐縮だが、筆者もかつて美術館のリニューアルに関わり、約4年間の休館を経験したことがある。この間も多岐にわたる業務でとても忙しかったが、学芸員の基礎体力をつくる展覧会の仕事ができなかったブランクは大きく、キャリアに少なくない影響を与えた。その分、再開館を迎えたときのことは忘れがたい。来館者が戻り沈黙が消えた美術館は息を吹き返したように見えたと、少なくとも私はようやく思いっきり活動できると希望を持っていた。久しぶりに訪れた大阪市立美術館では、多様な年代や国籍の鑑賞者が展示を楽しみ、カフェで休み、公園でくつろぐ姿を目にした。日本の美術館を取り巻く課題は山のようにあるが、それでも美術館という場所が人々に愛され、そして中で働くすべての人にとって多くの可能性が開かれた場となることを、心から願っている。



「阪神・淡路大震災30年 あれから30年—県美コレクションの半世紀」展会場風景 (写真提供: 兵庫県立美術館)

## 中国地方の 古代エジプトコレクションを巡って

渡邊祐子(わたなべゆうこ・下関市立美術館)



知る人ぞ知る話だが、中国地方は古代エジプトコレクションの宝庫だそうである。日本国内の美術館・博物館、大学などの研究機関のうち、古代エジプト関連のコレクションを所有するのは16施設。8つは東京に集まっており、残る8施設のうち4つが中国地方にあるという。その4館、岡山市立オリエント美術館、大原美術館、高梁市成羽美術館、下関市立美術館は、岡山県の3館と山口県の実業家大原孫三郎の支援で渡欧し、主に近代ヨーロッパ絵画の収集に奔走したが、この時同時に収集された古代エジプトの美術工芸品群は現在、大原美術館および高梁市成羽美術館に所蔵されている。彼とそのエジプトコレクションを巡り、この度いくつか動きがあったので紹介したい。

児島虎次郎の出身地の高梁市成羽美術館では、所蔵品展「児島虎次郎と古代エジプトコレクション」(1月5日～3月16日)が開かれていた。彼自身の作品で作風の変遷を眺めながら、そのかぎとなる時期にヨーロッパやエジプトで美術作品・資料の収集に取り組んだことが分かる。所蔵品展

に加え、美術館ではこの1月以降、児島収集の古代エジプトコレクションを継続的に展示するスペースを設け、公開を始めた。今後は開催中の展覧会とは別に、館が所蔵するエジプトコレクションの多くを、いつ訪れても観覧できるようになる見込みである。それぞれの資料の解説に加え、収集活動の詳細がイラストやマップで視覚的にも分かりやすく紹介されており、子どもや若い世代が見ても楽しめる。

児島虎次郎収集の近代ヨーロッパ絵画やエジプト・西アジアの古美術品を所蔵品の核とする倉敷市の大原美術館では、この4月3日、本館から徒歩1分程に位置する大正期の銀行建築が改装され、「児島虎次郎記念館」としてオープンした。グランドオープンに先立つ3月6日にはプレオープンが行われ、多くの来館者で賑わっていた。同館は、近郊のアイビススクエア内にあった施設が老朽化により2017年に閉館して以来、再開が待たれていた。記念館となった建物は、第一合同銀行倉敷支店として、1922年に竣工、その後、中国銀行倉敷本町出張所として2016年まで営業していた。銀行業務を終えた後の保存活用が検討された結果、大原美術館が寄贈を受けて児島虎次郎の作品および彼が収集した古美術品群を展示するための記念館として活用する方針となり、準備が進められてきたとのこと。資金調達には倉敷市企業版ふるさと納税も活用されたそうだが、今後の運用も含め一筋縄では行かない一大プロジェクトである

に違いない。建物の寄贈から9年越しで、関係者の知恵と努力が実を結んだ機会に立ち会った。観光客も多く行き交う倉敷の歴史地区で、今後は児島虎次郎の作品と、彼が収集した古代エジプト・西アジア等のコレクションの一部をいつでも目にするができるようになる。

今回時を同じくして、児島虎次郎に関する展示スペースや施設が整備され公開に至ったことは、注目に値する。それぞれの館が自館の持つリソースに立ち返り、作品や資料という物的な資産ばかりでなく、背後にある物語に価値を置きながら発信を試みている点に、学ぶところが多いように思う。同じ岡山県内の児島虎次郎ゆかりの美術館同士の連携により、児島自身の作品の再評価にも期待したいし、改めて彼と眼差しを共有した他の画家た

ちやコレクターたちの活動に、関心が集まるきっかけになってほしいと思う。

今年2025年は規模の大きなエジプト関連の展覧会が開催されており、再び古代エジプトに注目が集まることになりそうだ。岡山市立オリエント美術館と下関市立美術館が共同開催する「古代エジプト・ふしぎ発見!—ナイルの贈り物と秘められた物語」(岡山会場:7月12日～8月31日、下関会場:9月9日～10月19日)では、日本における古代エジプトコレクション成立に関わった人々の物語にも光を当てる予定である。児島虎次郎以外のキーパーソンについての話は、この特別展で。中国地方の美術館が持つ底力に注目していただけたら幸いである。



高梁市成羽美術館 古代エジプトコレクション展示室



大原美術館 児島虎次郎記念館プレオープンの様子

## 「合理的配慮」の実現を目指す 美術館機能の拡充について

高見翔子(たかみしょうこ・高松市美術館)



2021年の「障害者差別解消法」一部改正により、国をはじめとする公的機関・自治体に加えて、2024年4月からは民間事業者も含めて「合理的配慮」の提供を行うことが義務化されている。国内外の美術館においても、誰もがミュージアムを楽しむことのできる場や機会の創出を目指す取り組みが積極的に行われてきて久しいが、先述の民間事業者も含めた合理的配慮への取り組みの義務化により、さらに多角的な視点を伴いながらミュージアム・アクセシビリティに対する関心がますます高まりつつある気運を感じている。本稿では、直近の四国ブロックにおけるミュージアム・アクセシビリティに関する事例を中心に紹介したい。

まず、視覚障がい者を対象に含めた鑑賞プログラムとして、香川県立ミュージアムでは「みるって何だろう？-見えにくい・見えにくい人と共に行う美術鑑賞会」(2024年9月29日開催。「美術を探究ギモンにせまる」展(9月14日～11月10日)関連イベント)が開催された。昨年、当館の特別展でも開催したこの鑑賞会は、香川県立視覚支援学校教諭・朝倉成樹氏の提案を機に企画し、鑑賞や表現をはじめ視覚障がい者と共に行う美術活動を専門とする日野陽子氏(京都教育大学教育学部准教授)をアドバイザーに迎えて行われた鑑賞プログラムの第2回目である。視覚障がい者と晴眼者の参加者が一緒にグループを組み、グループ毎に鑑賞したい作品の前で互いに気になったポイントや感想を共有する等の対話を重ねながら作品鑑賞

を行うことで、参加者同士が他の人の新たな視点と自身の気づきを照らし合わせながら鑑賞を深めることが可能となった。今後も地域とミュージアムの協働を継続し、開催地を拡げながら第3回以降へと発展していくことを願う実践の一つである。

また聴覚障がい者を対象とした取組として、高松市美術館では「手話による絵本★読み聞かせ会」(2024年8月1日・17日開催。「谷川俊太郎 絵本★百貨展」(2024年7月20日～9月16日)関連イベント)を開催した。筆者が担当した本企画は、近藤龍治氏(香川県聴覚障害者協会理事長)による情感豊かな手話語りによる読み聞かせを谷川俊太郎の絵本スライドとともに鑑賞するものである。担当の所感としては、絵本の中に言葉では表現されない行間に至るまで細やかに手話で語るといふパフォーマンスな側面もあったことにより、聴こえる・聴こえにくいに関わらず、会場の参加者が等しく絵本の世界に浸ることができる鑑賞の場が実現できたのではないかと感じている。

加えて、筆者は会期中に展示を観ることが叶わなかったが、直近の四国地域での取り組みとして以下についても付記しておきたい。徳島県立近代美術館では、2018年より継続されているシリーズ展示「ユニバーサル美術館展 アートにタッチ！」(3月1日～16日)が開催され、彫刻作品等を対象とした「手でみる鑑賞」がテーマであった。愛媛県美術館では、「山川コレクション収蔵記念 PHOTOGRAPHY 写真のこれまで/これから」

展(1月31日～3月30日)の会期中、予約制で視覚障がい者の鑑賞サポートを実施しており、希望者には総合案内から手引きして鑑賞補助を行っていた。

また高知県立美術館では、「生誕200年 河田小龍一激動期への眼差し」展(11月9日～1月5日)より、乳幼児連れの親子が気兼ねなく鑑賞できる新たな試みとして「ベビーフレンドリーアワー」を実施している。予約制かつ定員も少数に設定し、また15分程度のミニギャラリートークも行うなど、参加者が安心して鑑賞を楽しむことができるよう配慮している。「浜田浄めぐる 1975-」展(2月8日～4月13日)の会期中にも継続してベビーフレンドリーアワーが開催されており、運営面でのポイントとして、「参加者の年齢や人数によって細かくケアが異なるので、あらかじめ幾つか対応パターンを想定しておくこと」<sup>1</sup>の重要性、対象者への周知に加えて一般の来館者の理解も得られるよう「実施の雰囲気づくりのための周知」<sup>2</sup>の重要性が挙げられている。その他、親子で安心して作品鑑賞ができるだけではなく、親である参加者自身にとって「出産や育児の息抜きにすぐオススメ」<sup>3</sup>という感想も寄せられており、特に興味深く感じた。親子向

けのイベントを企画する際、参加対象の子どもたちに意識が向きがちになるが、参加する親の視点も含めて考えることも、よりミュージアムを楽しむ機会を創出することへと繋がるのだと改めて認識することができた。

本稿の事例紹介では、個別への対応よりもアクセシビリティに係る美術館で行われた企画が中心であったが、2024年に国立アートリサーチセンターが発行した『合理的配慮のハンドブック』には、障がいを持つ方や乳幼児を連れた来館利用の際、個別の要望に美術館側が丁寧に対話を行いつつ合理的配慮を実現していくためのポイントがまとめられている。それぞれの現場において、今後もマンパワーや予算の可能な範囲でかつ個別に柔軟な対応が求められていくことは明白であるが、合理的配慮を可能にしていくために様々な立場の来館者を意識した包括的なプログラムの実施・継続を進めながら、ミュージアムに対する人々のニーズを情報収集していく姿勢が一層求められていくことを切実に感じた。

1、2、3:「ベビーフレンドリーアワー」の企画担当である高知県立美術館・茂木恵美子学芸員へのメールインタビュー回答より引用した。(2025年4月14日回答)



高松市美術館 「谷川俊太郎 絵本★百貨展」関連イベント「手話による絵本★読み聞かせ会」の様子



高知県立美術館「浜田浄めぐる 1975-」展関連イベント「ベビーフレンドリーアワー」の様子(写真提供:高知県立美術館)

## 表現の現場と地域をつなぐ場所

楠本智郎(くすもとともお・つなぎ美術館)



アーティストと主催者の双方にメリットがあるレジデンスプログラムは、九州でも様々なかたちで実施されてきた。宮本初音(ART BASE 88)と家入健生(BEPPU PROJECT)が中心となり作成を進めている「九州 AIR マップ」によると、当該地域では27ヶ所(2025年4月27日現在)でレジデンスプログラムが実施されている。その多くは民間団体や個人によって運営されており、公立館による事例は福岡アジア美術館、つなぎ美術館、九州芸文館の3館のみである。また、民間団体によるプログラムのなかには、作品の制作や展示を伴わないものもあるが、これらの公立館ではいずれも滞在の成果を後述のように作品展示という方法で公開している。

福岡アジア美術館の「あじびレジデンスの部屋3都市を映す」展(12月19日～4月8日)は、1999年の同館開館当初に始まったレジデンスプログラムで収蔵した作品のなかから、商業都市でもある福岡市の特性と向き合った3人のアーティストが滞在中に制作した作品を選んで再び展示し、人口と経済が集中する都市の姿を捉え直すことを目指した。ムン・キョンウォン(2004年度滞在、ソウル出身)、チュンリン・ジョリーン・モク(2015年度滞在、香港出身)、チェン・ウェイジェン(2023年度滞在、台北出身)は、同館からさほど遠くない場所にある商店街や繁華街、あるいは路地裏などで行ったフィールドワークの結果を作品に反映させている。

つなぎ美術館の「ホワン・ピンリン さざめく波

と木漏れ日：思いがとどまる場所」(12月7日～2月24日)は、同館が2014年から実施する「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」の2024年度の成果展であり、都市部から遠く離れた熊本県南部にある津奈木町で、ホワン・ピンリン(台湾・新竹出身)が約3ヶ月半の滞在中に制作した作品を展示した。これまで、都市生活における自身の記憶や心情をささやかな自然の移ろいとともに抽象的に描いてきたホワンであるが、津奈木町滞在中には人々の暮らしや土地の記憶を織り交ぜた具象的な作品も描いた。これら2館のプログラムは、前者は都市部、後者は過疎地という対照的な地域で実施されたが、いずれのアーティストもこれまでにない体験をもとにした新たな作品をそれぞれの館に残している。

九州芸文館は、芸術全般と人々との交流の場を目指して開設されたアートセンターである。そのため、2024年度のレジデンスプログラムの成果展「ケジア・アレクサンドラ 死を問う詩」(3月15日～30日)においても作品の展示のみで、収蔵はしていない。アレクサンドラ(ジャカルタ出身)は、約1ヶ月半の滞在期間中にインドネシアと日本の人の死に対する考え方に共通点を見だし、地域の風景や人材を取り込みながら、いくつものスクリーンとプロジェクターなど映像機器を駆使した没入型の映像インスタレーションを完成させ、再構築した過去の映像作品と交えて公開した。

レジデンスプログラムの目的にもよるが、作品の

収蔵を前提とするか否かは、アーティストにとってもプログラムを運営する館にとっても悩ましい問題である。また、すでにコレクションを有す美術館がレジデンスプログラムを実施する必要性や、その際に生じる課題については、館ごとに議論の余地があることはいうまでもない。

最後にレジデンスプログラムではないが、会期中に会場で表現者でもある大阪の“オバチャン”たちによる実演プログラムを実施し、展覧会にライブ感をもたらした佐賀大学美術館の「あらわすいと なみ Vol.1 kioku 手芸館 たんす」展(11月29日～2月2日)を紹介する。同展は大阪市西成区にある元タンス店を拠点に、2003年からアーティストの西尾美也らが近隣住民を中心とした多様な人々と協働で継続してきた創作活動を取り上げている。現在の活動の中心となっているファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」の衣類制作の現場や、そこにつながるネットワークが包括する高齢者や外国人の存在もしっかりと伝わる展示であった。しかも、会期中の数日間とはいえ、そこに

衣類を制作している大阪の“オバチャン”たちを招聘し、観覧者と交流を図るアイデアは、大学美術館という特殊な環境にこれまでにない「場」をつくりだした。同館は大学の敷地内にあり、同展もレジデンスプログラムではないため、単純に先述の3館の取り組みと比較はできないが、これまでつながりがなかった場所から表現者がやってきて、制作の過程と結果を人々と共有した点は共通している。この思い切った取り組みは、会場を訪れた教員や学生をはじめとする人々の一部が抱いていた美術館や美術そのものに対する固定観念を払拭したに違いない。

筆者は九州で数少ない公立館のレジデンスプログラムのひとつを企画・運営する立場にある。したがって、近年は当該地域のレジデンスプログラムに関するシンポジウムに登壇する機会も増え、アーティストの創作活動が地域や美術館にもたらす影響とそこから浮かび上がる様々な課題をあらためて知ることとなった。



つなぎ美術館「ホワン・ピンリン さざめく波と木漏れ日：思いがとどまる場所」展 会場風景



九州芸文館「ケジア・アレクサンドラ 死を問う詩」展 会場風景

no. 1

《会津の冬》の画家が縁の地に残した美術館

## やないづ町立斎藤清美術館

〒 969-7201 福島県河沼郡柳津町大字柳津字下平乙 187



TEL: 0241-42-3630  
FAX: 0241-42-3631  
E-mail: bijutsu@town.yanaizu.fukushima.jp

【開館時間】  
午前9時から午後4時30分まで(入館は午後4時まで)

【休館日】  
月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、  
展示替期間、年末年始

【開館時期】  
1997年10月1日

日本屈指の豪雪地であり、そこで生き抜くため独自の文化と歴史を培ってきた福島県・奥会津。その玄関口に位置する柳津町に、やないづ町立斎藤清美術館はある。戦後間もない頃に日本現代版画の実力を世界に知らしめた画家、斎藤清(1907-97)の個人美術館として、1997年に開館した。現在では、1,000点を超える作品のほか、版画の原版や画具、手紙類などの関連資料類も多数保管しており、斎藤清のものとしては最大規模のコレクションとなっている。

斎藤清は柳津町に隣接する会津坂下町で生まれたが、幼少時に家族と北海道に移住、長じてのちは東京・鎌倉に居を構えた。柳津町には1987年から亡くなるまでの10年間を過ごし、さらにそれ以前、取材のために会津に足繁く通っていた際の拠点の一つでもあった。今も、厳冬期のスケッチ取材に同行した、絵を描いている画家と親しく言葉を交わした、という思い出話を語る町民は少なくない。斎藤は町に度々作品を寄贈しており、1976年には名誉町民に推挙されている。画家と町との間で育まれてきた縁が、やないづ町立斎藤清美術館の誕生につながった。加えて、斎藤が暮らした町内の家も、「斎藤清アトリエ館」として保存公開されている。

そうしたいきさつゆえ、当館は開館当初から、地

域に根差す美術館をスタンスにして事業を行ってきた。その主体となってきたのは、いうまでもなく斎藤清の作品であるが、近年では、大学とのコラボレーションによる斎藤清や柳津町の伝統文化にフォーチャーした創作活動や、若い版画家たちの作品を紹介する展覧会なども積極的に展開している。

一方、斎藤清の顕彰も当館の重要な活動である。「会津の冬」シリーズで知られる斎藤だが、風景画をとっても日本国内はもとより欧米諸国や韓国、インドなども描き、さらに、仏像、埴輪・土偶、人物、動植物、雲や太陽等々、モチーフとした題材は実に多岐にわたる。また斎藤は、画材が偶発的にもたらずマチュールをイメージへと昇華させることに卓越したセンスを持った画家でもあった。その最たるものの一つであるコラグラフは、知名度も人気も低いのだが、実は斎藤の絵画理念が強く反映された作品群である。そうした知られざる名品などを多くの人々に知ってもらおうべく、年に4〜5回のペースで様々な切り口による企画展を開催している。

2027年には開館30年の節目を迎える。この年にはまた斎藤清の生誕120年、没後30年にもあたる。斎藤清という画家をどのように発信し、継承していくのか。地域に根差しながらの模索はこれからも続く。

(伊藤 たまき・いとう たまき)

no. 2

建築文化を身近な環境や暮らしと結びつける

## 公益財団法人ギャラリー エークワッド

〒 136-0075 東京都江東区新砂1-1-1



TEL: 03-6660-6011  
FAX: 03-6660-6097  
E-mail: gallery@a-quad.jp

【開館時間】  
午前10時から午後6時まで(土曜日は午後5時まで)

【休館日】  
日曜祝日

【開館時期】  
2005年

ギャラリーエークワッドは、2005年に竹中工務店の企業ギャラリーとして創設され、2013年に公益認定を受けた。「建築・愉しむ」をコンセプトに、建築文化の発信を活動の基底に据え、自主企画による展覧会と関連するイベント(シンポジウム、ワークショップ、見学会、写真撮影会など)を中心に、建築文化を幅広く一般に普及させる活動を続けている。

コレクションは収蔵しないが、企画展ごとに調査した資料や、講演会などの映像記録の蓄積をアーカイブ化してウェブサイト上で公開することにより、多くの方々に、いつでもどこからでも情報の提供ができるよう整備を進めている。また、展覧会の場所もエークワッドにとどまらず、企画をパッケージ化し国内外の国公立美術館、大学や民間施設への巡回も積極的に取り組んでいる。(世田谷美術館、兵庫県立美術館にて開催した「アイノとアルヴァ 二人のアールト」展/2021、ケーブアンミュージアム(米)、青森県立美術館、スパイラルガーデンほかへ巡回した「ヴァージニア・リー・バー튼の『ちいさいおうち』」展/2017-18、岐阜県現代陶芸美術館、茨城県陶芸美術館ほかへ巡回した「Marimekko Spirit」展/2018-19など)

企画の内容は、建築文化を、技術やデザインで

けでなく身近な環境や暮らしと結びつける独自の切り口で、衣食住に関わる身近な話題から、現代アート、宇宙科学まで幅広く、さらに国内外の環境問題や女性活躍などの社会事象にもおよぶ様々なトピックを、建築の分野から次の6つのテーマで読み解く。

①歴史をひも解く ②暮らしをデザインする ③豊かな社会を描く ④自然と共に暮らす ⑤観て触れて、五感で学ぶ ⑥人材を育てる

また、展示の特色として、空間の魅力を表現するため、原寸大のモックアップや模型などリアルに体験できるコンテンツの制作に力を入れている。対象も子どもから専門家まで幅広くモノづくりワークショップや講演会、またダンスパフォーマンスや音楽会などを開催し、多くの方に建築文化への理解を醸成し、社会の関心の裾野を広げることに貢献したいと考えている。

受賞歴: 2014年企業メセナ協議会よりメセナ大賞、2022年メセナアワード優秀賞、2021年世田谷美術館、兵庫県立美術館にて開催した「二人のアールト」展で西洋美術振興財団より文化振興賞を受賞。また2024年日本建築学会賞(業績)、2025年科学技術分野の文部科学大臣表彰「科学技術賞」を受賞。(岡部三知代・おかべみちよ)

## 豊島区立 熊谷守一美術館

〒 171-0044 東京都豊島区千早 2-27-6



TEL: 03-3957-3779

FAX: 03-3959-9211

E-mail: info@kumagaimori.jp

[開館時間]

午前 10 時 30 分から午後 5 時 30 分まで (入館は午後 5 時まで)

[休館日]

月曜日 (祝日問わず)、臨時休館あり

[開館時期]

1985 年 5 月

熊谷守一美術館は、画家・熊谷守一(1880-1977)が 1932 年から没年まで暮らした自宅跡地に、私設美術館として 1985 年 5 月に開館した。創設者である次女の熊谷榎も作家であり、「作家は作品を残すべき」という信念のもと、旧宅と庭はすべて取り壊され、3 階建てのコンクリート造美術館が建設された。

守一は 1900 年、東京美術学校西洋画科に入学し、青木繁らと共に黒田清輝や藤島武二に師事。初期には《轢死》《蠟燭》などの作品で注目される。その後しばらく制作から離れるが、再上京・結婚を経て、フォーヴィスム風の画風を取り入れながら、晩年には身近な小動物や草花、風景、静物を平面化・簡略化した画面に、特徴的な輪郭線を加える独自の「モリカズ様式」を確立した。

当館の所蔵作品は、守一が自宅に遺したものを中心に、ご遺族や関係者からの寄贈・寄託により構成されている。とりわけ寡作だった 30 代・40 代の初期作品から最晩年にかけてのモリカズ様式の作品を楽しむことができる。油彩画の絶筆《アゲ羽蝶》も当館でご覧いただける。

開館当初は 1 階のみが展示室で、2 階は貸しギャラリー、3 階には設計事務所が入居していたが、

2007 年に豊島区立となり、現在は 1・2 階が展示室、3 階がギャラリーとして整備された。現在は寄託・寄贈された熊谷守一作品 235 点のうち、常時 60 点ほどを展示している。また毎年、5 月の開館記念日の時期には特別企画展として 1 階から 3 階までの全室を利用して守一作品を展示する。この特別展も開館当時から毎年必ず実施してきており、2025 年には 40 回目の特別展「めぐる いのち 熊谷守一美術館 40 周年展」を開催した。

活動方針は、熊谷守一及びその娘・熊谷榎の作品と資料の収集・研究にある。榎は主に山岳画を描き、油彩画のほか、貼り絵、陶板、石彫といった多様な作品を残している。また、熊谷家に関する資料の公開・展示も当館の特色の一つと言える。

開館当初から続くカフェやミュージアムショップ、榎が毎週参加していた金曜夜のヌードデッサン会など、独自の教育普及活動も大切に継承している。私設時代に榎が築いた運営基盤は、現在は株式会社榎が指定管理者として運営を継続し、区立化後もその理念と活動を引き継いでいる。地域に根ざし、守一芸術の魅力を伝える小さな美術館として、日々活動を続けている。

(高崎真樹・たかさきまき)

## 軽井沢安東美術館

〒 389-0104 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢東 43 番地 10



TEL: 0267-42-1230

FAX: 0267-42-1220

E-mail: info@musee-ando.com

[開館時間]

午前 10 時から午後 5 時まで (入館は閉館 30 分前まで)

[休館日]

水曜日 (祝日の場合は翌平日)

[開館時期]

2022 年 10 月 8 日

軽井沢安東美術館は、実業家・安東泰志と恵夫人が約 20 年にわたって蒐集してきた藤田嗣治の作品だけを所蔵する私設美術館として、2022 年 10 月 8 日、軽井沢駅北口から徒歩 8 分の閑静な通りに開館した。「自宅の壁を飾ってきた藤田の絵をくつろいで鑑賞していただきたい」という夫妻の思いから当館のコンセプトは「自宅のような美術館」。安東邸をモデルに外壁には赤レンガを使用し、中庭をめぐるように 2 階に配置された展示室は色鮮やかな壁で囲まれている。

展示室は「渡仏—スタイルの模索から乳白色の下地へ」、「旅する画家—中南米、日本、ニューヨーク」、「ふたたびパリへ—信仰への道」といったテーマごとに区切られ、初期から晩年にいたるまでの藤田作品をご覧いただくことができる。春、夏、秋と年に 3 回行われる展覧会では、クロノロジカルなスタイルをベースとしながら、様々な切り口で藤田嗣治の人生を紹介、また夫妻が好んで蒐集した少女と猫の作品で溢れたリビングルームのような空間や、藤田の「本のしごと」や「手しごと」を展示したスペースもあり、幅広い藤田作品をご覧いただける。

各展覧会の出品数は初公開作品や資料を含め、

常時 150 点～ 200 点で、これほど多くの藤田作品をいつでも鑑賞できるのは当館だけであろう。なお、現在の所蔵作品数は約 250 点で、藤田の代表作《猫の教室》(1949 年)をはじめ、《街はずれの門》(1918 年)、《自画像》(1923 年)、《横たわる女性》(1923 年)、《メキシコの男》(1933 年)、《パリの屋根の前の少女と猫》(1955 年)、そして《金地の聖母》(1960 年)などがある。写真、手紙、手帳などは、寄託品を含めるとこちらも約 250 点を数え、展示の内容を充実させるだけでなく、藤田研究を深めるうえでも貴重な資料だ。将来的には、これらをアーカイブ化し、国内外の研究者が活用できるようにしたいと考えている。

当館 1F には、カフェ、レストランほか、ミュージアムショップと「サロン ル ダミエ」がある。ショップで販売するグッズのほとんどは当館オリジナルで、ラインナップも豊富だ。サロンでは、作品の解説動画とフリードリンクを提供するほか、定期的にコンサートや講演会も開催し、軽井沢の文化的・芸術的な発展に貢献している。またサロン・レンタルも実施。今後はワークショップなども企画し、地域連携を視野に入れ、サロン活用の幅を広げていきたいと思う。(樽沼範子・くれぬまのりこ)

## 東御市 梅野記念絵画館・ふれあい館

〒 389-0406 長野県東御市八重原 935-1



TEL: 0268-61-6161  
FAX: 0268-61-6162  
E-mail: umenokinen@ueda.ne.jp

【開館時間】  
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで (入館は午後 4 時 30 分まで)

【休館日】  
月曜日 (月曜日が祝祭日の場合は翌火曜休館)、祝日の翌日、  
年末年始 (12/28-1/5)、その他展示替え期間

【開館時期】  
1998 年

東御市梅野記念絵画館・ふれあい館は、美術品コレクター・梅野隆 (1926-2011) の蒐集した日本近代洋画を中心とする 430 点の作品の寄贈を受け、1998 年に開館した公立美術館である。

梅野隆の父・満雄は明治期の天才画家・青木繁を献身的に支え、作品を今日に伝えることに大きな貢献を果たした。その精神を受け継いだ隆は「特異な業績を上げながら忘却されている作家や、不遇な生涯を終えた作家で現在は埋没しているが忘れ去られるには惜しい作家の顕彰」を理念として、作品の発掘、蒐集、研究を行い、作家の再評価に努めてきた。

館ではこの方針に基づき、近代美術史上、不遇のうちに見過ごされつつある重要作家の研究と展示を中心に、あわせて地元作家の紹介や教育普及活動などを展開している。開館以来コレクションは拡充し、現在では青木繁の素描をはじめ、今西中通、伊藤久三郎、菅野圭介などの近代画家のほか、林俊衛や山本鼎、倉田白羊、横井弘三といった地域にゆかりのある作家などを含む日本近現代美術の作品およそ 1,200 点を収蔵する。

館内に入ると、遠くに浅間連峰を望む開放的なホールが来館者を迎える。常設展示室では、梅野隆が最も敬愛した油彩画家・菅野圭介の特設展示を中心に、季節ごとに展示替えを行いながら、多様性に富んだコレクションの魅力を発信している。

二つの企画展示室では、館独自の企画による展示会を年間 4～5 本以上開催。これまでは荘司貴和子や小倉尚人などの優れた埋没作家の顕彰を目的とする特別展のほか、「東信濃工芸作家展」や「上田クロニクル 上田小県洋画史 100 年の系譜」といった地元の芸術文化に焦点を当てた展示会を展開した。

ギャラリートークやワークショップ、講演会などの幅広い世代に向けた普及活動も主要な事業である。なかでも、満月の日の夜には「ナイトミュージアム」として夜景とともに楽しむコンサートを開催し、親しみやすい芸術鑑賞の場を創出している。また、東御市が推進する小中学校における「朝鑑賞」事業と連携し、地域の小中学校への作品画像データの提供や、学芸員によるファシリテーション支援を実施。さらには、近年の中学校部活動地域移行に合わせ、部活指導の支援など、地域との協働によるまちづくりを通じ、地域の一員としての美術館運営に努めている。

来年度には開館 28 年目を迎え、梅野隆生誕 100 年を記念とする大規模な回顧展を開催予定である。純粋に美を愛したコレクターの志と、日本近代美術史に埋もれた作家たちの存在を後世へと繋ぐとともに、地域の文化資源を育む拠点として、さらなる発展を目指している。

(佐野悠斗・さのゆうと)

美術史に埋もれた名作を次代へと繋ぐ

## NISSHA 印刷歴史館

〒 604-8873 京都市中京区壬生花井町 3



TEL: 075-823-5318  
E-mail: info@nisssha-foundation.org

【開館時間】  
午前 10 時から午後 5 時まで (前日までに電話でお申し込み)

【休館日】  
土・日・祝日・年末年始

【開館時期】  
2009 年 1 月 30 日

NISSHA 印刷歴史館が建つ当地は、遠く平安京時代には、都の中心に位置し、836 年頃に嵯峨天皇により建てられ、宇多天皇や村上天皇など歴代天皇が譲位後に上皇としての住まいとされた朱雀院の跡地である。

明治に入り、織物の産地として栄えた西陣の企業家によって設立された紡績会社 (旧京都綿ネル) が 1898 年にこの地で操業を開始。その本社事務所として 1906 年に建てられた総レンガ造りの明治の建物を 1948 年に NISSHA 株式会社が引き継ぎ、専門家による本格的な構造調査を経て、2008 年に耐震補強を含む大規模な保存修理工事を完了した。翌年には文化・芸術の継承・振興および向上発展を目的に設立された一般財団法人 NISSHA 財団が管理・運営する NISSHA 印刷歴史館が建物 1 階に開設され現在に至る。

なお、この建物 (NISSHA 本館) は、明治時代の産業遺産を今に伝える大変貴重な建物として、2011 年に文化庁により国・登録有形文化財に登録された。

さて、NISSHA 株式会社の正門から入った来館者が最初に目にするのが、威風堂々とした 2 階建て洋館風のこの建物。正面玄関の車寄せは、ひとつの御影石から削りだされた繋ぎのない 4 本のコリント式石柱でできており、イギリス製の装飾鉄板を貼り付けた天井や、ケヤキ 1 本削りの階段手すり、

スタンドガラスなどが、漆喰の白壁と廊下の赤いじゅうたんに映える。

この貴重な建物の中にある NISSHA 印刷歴史館は、決して広いスペースではないが、第一展示室は印刷の歴史に関する資料を、第二展示室は構内再開発時に取り壊した旧京都綿ネル時代の建物の一部を明治期の貴重な遺構として展示。そして第三展示室は様々な形態の古い欧文タイプライターや和文タイプライターのほか、当時の印刷技術の粋を集めた「国宝全 6 巻」や「原色日本の美術 32 巻」などを展示し、日頃見る機会の少なくなった書籍が自由に閲覧できる。

特に第一展示室は印刷の起源から現在に至るまでの歴史や印刷技術の変遷を学べる場として広く活用されており、実物や複製の展示品に関するパネルや映像のほか、係員による詳しい説明も聞くことができる。

主な展示品として、楔形文字が刻まれた「粘土板」、世界最古の印刷物「百万塔・無垢浄光陀羅尼経」の実物。複製品としても世界に数台しかない「グーテンベルク印刷機」と活字や鉛合金の見本。実物の「42 行聖書零葉」と同ファクシミリ版の上下巻。「解体新書」の初版本や、長崎版「英文典初歩」、木製の「石版印刷機」、「ハイデルベルク活版印刷機」、「木活字」、「鉛活字と字母」、「活字鑄造機」などがある。  
(小西均・こにしひとし)

従来にない新たな表現活動の在り方を模索

## 佐賀大学美術館

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地



TEL: 0952-28-8333  
FAX: 0952-28-8215  
E-mail: sbj8333@mail.admin.saga-u.ac.jp

【開館時間】  
午前10時から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

【休館日】  
月曜日(祝日の場合は翌火曜日)、展示替え等、  
夏季休業: 8/13 ~ 8/15、冬期休業: 年末年始

【開館時期】  
2013年10月2日

佐賀大学美術館は、2013年10月、「旧佐賀大学」と「佐賀医科大学」が統合して10周年を迎えるのを記念し、教育・研究に有意義に活用でき、また、地域・社会貢献の一環となるよう設置された全国的にも珍しい国立大学の美術館である。「資料の収集・保存・管理・研究・展示」「国立総合大学の美術館としての実践的研究・教育とその発信」「地域におけるアート・センターとしての役割」の3つをミッションに掲げ、美術・工芸に関する作品を展示・収集・保管し、広く地域の方々の観覧に供するとともに、これに関する教育及び研究に資することにより、芸術及び文化の振興を図ることを目的としている。

収蔵品は現在111点であり、石本秀雄、久富郁夫、緒方敏雄、城秀男ら本学の元教員や地域ゆかりの作家の作品が中心である。開館10周年となった2023年には、「佐賀大学美術館10周年記念展 響きあうアート 一美の拡がり、美術の拡がり」を開催し、本学芸術地域デザイン学部で教鞭をとる

アーティストらと他学部の教員がコラボレーションした展示を行った。美術と物理学、心理学、哲学、民俗学といった掛け合わせを行い、従来にない新たな表現活動の在り方を模索するものであった。現在は、年間4-5企画程度の美術館主催企画を行い、若手・中堅アーティストの個展や地域に根差した表現活動を紹介する展覧会などを開催している。また、館外で行うプロジェクトも進行している。主催事業がない期間においては、学内外の団体に貸し出しを行い、学生や市民団体等が利用できる空間として、年間約25団体程度が利用している。2025年度からは旧カフェスペースを美術館分館のような役割として運用を始めた。通常美術館には持ち込みできないとされる水や有機物などが使用でき、より多様な表現の発表の場として利用できる。今後はより広く地域に開かれた大学美術館ならではの特色ある事業を継続していきたい。

(五十嵐純・いがらしじゅん)

Kumahira  
www.kumahira.co.jp

美しく守る技術

### 空気質改善

ケース内の空気を循環させるファンユニット

### 有害ガス吸着フィルター

展示物に悪影響を与える酢酸ガスやアンモニアガスを吸着。ケース内における有害ガスの発生をなるべく少なくできるように、使用する素材にも配慮しています。

### 調湿剤ボックス

調湿剤ボックスを通過することで、一定の湿度に保ちます。

### 収蔵庫内装にも

使用される調湿建材

### キュアライトS

展示床面の調湿建材「キュアライトS」が湿度環境の安定化をサポートします。

### 鑑賞性アップ

### 高透過ガラス・高演色LED照明

ガラスはフロートガラスと透明度の高い高透過ガラスの2種類からお選びいただけます。照明は標準仕様として調光可能な高演色LEDを採用し、さらに色温度の変更も可能な調光調色仕様もご用意。展示物をありのまま美しく魅せます。

クマヒラミュージアムケース

ART CELLAR SERIES

アートセラシリーズ

展示物を湿度や有害ガスから守り、鑑賞性を高める

株式会社クマヒラ 本社 〒103-8314 東京都中央区日本橋室町2-1-1 日本橋三井タワー14階 TEL.03-3270-4381  
株式会社熊平製作所 〒734-8567 広島市南区宇品東2-1-42 TEL.082-251-2111

詳しくは  
WEBへ



目録などへの展示作品掲載（複製権）について

棚井文雄（たない ふみお / 日本写真著作権協会、写真家）

当会には、著作権に関する様々な問い合わせがあります。その中から、美術館や学芸員の方から寄せられる問い合わせの一例を紹介させていただきます。

美術館が、購入したあるいは写真家から寄贈された作品（プリント）を展示するに際して、目録を作りたいが写真家に許諾を得る必要があるのかどうかというケースです。作品（プリント）から印刷用のデジタルデータを作る、あるいはデジタルデータを目録などに印刷することは複製にあたり、著作権者（写真家）の許諾が必要となります。ただし、美術館が、その作品を解説もしくは紹介することを目的とする小冊子などへの掲載は、必要と認められる限度において、作品（展示著作物）を複製できるとされています。

ここでいう小冊子について、過去の判例をみると、「観覧者のために著作物の解説又は紹介をすることを目的とする小型のカタログ、目録又は図録といったものを意味し、たとえ、観覧者のためであっても、実質的にみて鑑賞用の豪華本や画集といえるようなものは、これに含まれないものと解するのが相当である。（中略）紙質、規格、作品の複製形態等により、鑑賞用の書籍として市場において取引される価値を有するものとみられるような書籍は、実質的には画集にほかならず、（中略）『小冊子』には該当しないものといわざるをえない」\*と裁判所は述べています。写真作品を大きく掲載する場合にも、鑑賞用と判断される可能性が高いと考えられるでしょう。

美術館に関連した相談として、数年前にある写真家の奥さまから著作権について聞かれたことがあります。それは、旦那さま（故人）が、ある美術館で作品展を開催（その際にプリントを寄贈）されたのですが、後に、その作品を利用したいと思った奥さまの友人がその美術館に問い合わせをしたところ、「利用できる」（デジタルデータの貸し出しをする）との返答とともに、「1点数万円の利用料金がかかる」と説明され、泣く

泣く断念したということでした。奥さまは納得がいかなかったものの、どうして良いのか分からずに時間が経過してしまっていました。著作権はその写真家の死後、奥さまが相続していることから、利用許諾やその条件については奥さま（著作権者）が決めるものであることをお伝えすると、友人には次の機会に無償で利用してもらいたいと安心された様子でした。

この美術館が有しているデジタルデータが、目録の作成などのために原作品（プリント）から複製したものであつかは分かりませんが、このように作品（プリント）の所有者が有償で利用許諾を出している事例は他にもあり、日本における写真の著作権への理解をもっと広めていく必要があると痛感しました。

著作権は、著作者の生存中及び死後 70 年間にわたって保護されます。しかし、かつて写真だけが、他の著作物（文芸、学術、美術、音楽）とは異なり、その保護期間は、公表後あるいは創作後 10 年間で極端に短いものでした。我々（写真家）の先人たちはその状況を変えるべく、数々の反対意見に屈することなく、血の滲むような努力を続け、やっとのことで現在の写真の著作権を勝ち取りました。

当会は、日本の主要な写真 11 団体を会員とし、写真著作権の普及啓発と作品の適正利用をはかるため、社会教育施設や大学での講義、写真家、写真愛好家、写真を利用される方々へ向けたセミナーを全国で開催しています。また、著作者による執筆のほか、写真分野に限定せず、さまざまな立場の方へのインタビューなどを掲載した広報誌『JPCA NEWS』（年 4 回発行）も発行しています。写真、美術関連団体のほか、教育機関などへの提供（無料）も行っておりますので、ご興味を持っていただけましたらお問い合わせください。著作物の適正かつ円滑な利用のためにルールやマナーを尊重していただき、写真作品の積極的な活用をお願いできればと思います。

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

公益財団法人ポーラ美術振興財団 [公益財団法人]		
ブルームバーグ・コネクツ [芸術文化を支援する慈善団体]		
公益財団法人鹿島美術財団 [公益財団法人]		株式会社集英社 [出版業]
エア・ウォーター防災株式会社 [製造業]	カトーレック株式会社 [一般貨物自動車運送業]	
共同通信社 [通信社]		光明理化学工業株式会社 [製造業]
株式会社高島屋 [小売業]	株式会社DNPアートコミュニケーションズ [サービス業]	
株式会社伏見工芸 [展示装飾業]	ヤマト運輸株式会社 [美術品輸送]	読売新聞東京本社 [新聞]
株式会社グッドフェローズ [Webチケット販売、発券精算システム]		株式会社水声社 [出版業]
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団 [製造業]		株式会社ユニークボジション [情報サービス業]
アート印刷株式会社 [デザイン・印刷・出版業]	株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ [美術展企画等]	
株式会社アルテ舎 [展覧会企画・ミュージアムショップ運営]	有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク [展覧会企画制作]	
エヌ・アンド・エー株式会社 [アートコンサルティング]	株式会社NHKエデュケーションナル [映像を中心とするコンテンツ制作]	
株式会社NHKプロモーション [展覧会等のイベントの企画・制作]		株式会社加島美術 [美術商]
株式会社ギャラリーためなが [画廊]	株式会社キュレイターズ [企画・デザイン・コンサルティング]	
協同組合美術商交友会 [美術業界団体]	株式会社熊平製作所 [製造業（収蔵庫設備・入退館ゲート）]	
株式会社クレヴィス [展覧会企画・出版]	金剛株式会社 [製造業（保管機器・鋼製家具製造）]	
産経新聞社 [新聞、広告、出版]	株式会社 The Chain Museum [IT・サービス業]	
進和テック株式会社 [ガス対策機器販売]	公益財団法人西洋美術振興財団 [芸術・文化振興]	
一般社団法人全国美術商連合会 [美術業界団体]	大日本印刷株式会社 [総合印刷業]	
株式会社東京美術倶楽部 [美術業界団体]	株式会社トップアート鎌倉 [額縁額装・画材]	
中西出版株式会社 [図録・書籍の制作・出版]	株式会社美術出版社 [出版事業]	
美術商社 盛林株式会社 [アートギャラリー]	本州四国連絡高速道路株式会社 [運輸業]	
有限会社丸栄堂 [美術商]	公益財団法人三菱財団 [公益財団法人]	
株式会社メルコグループ [資産管理]	ライトアンドリヒト株式会社 [照明器具販売]	
株式会社ロココ [ITサービス事業]	早稲田システム開発株式会社 [ミュージアム向けITサービス提供]	
イカリ消毒株式会社 [サービス業]	M&Iアート株式会社 [美術商]	
東京新聞 [新聞業]	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 [印刷業]	
一般社団法人日本写真著作権協会 [権利者団体]		
株式会社丹青研究所 [サービス業（コンサルティング）]	有限会社アート・フリース [グッズ制作・販売]	株式会社アートローグ [コンサルティング業]
影山 幸一 [アートプランナー]	株式会社Gakken [出版業]	株式会社求龍堂 [出版・デザイン業]
株式会社生活の友社「美術の窓」	「アートコレクターズ」[出版社]	株式会社TTトレーディング [HOGOS]
トライベクトル株式会社 [翻訳サービス業]	株式会社美術年鑑社「新美術新聞」[出版業]	株式会社レンプラント [画廊]

## 第5回定時社員総会等について

事務局次長 生島達久（おじま たつひさ）

令和7(2025)年6月4日(水)、大分県大分市において開催された第5回定時社員総会及び令和7年度第2回理事会についてご報告します。

社員総会に先立ち、同日の午前中、iichiko 総合文化センター4階の会議室において、令和7年度第2回理事会が開催され、第1回理事会開催(4月30日)後に入会申込のあった個人会員及び賛助会員への入会申込の審議と合わせて退会する正会員及び賛助会員の報告並びに運営基盤の安定化を図る必要から正会員の年会費値上げについて検討するための委員会の設置についての審議が行われ、決議されました。また報告事項として定款第42条第2項に基づく会長からの職務執行状況及び賛助会員証の発行についての報告があり、閉会しました。

その後、13時からiichiko 総合文化センター「音の泉ホール」において、大分県立美術館を担当館として、第5回定時社員総会が行われました。

開催にあたり大分県の尾野賢治副知事から歓迎挨拶、文化庁の企画調整課博物館振興室の木村守平専門官から祝辞の後、大分県立美術館の田沢裕賀館長の議長により、正会員館148館の出席(議決権行使172個)により、法人化後の対面による総会としては4回目となる社員総会が行われ、まず令和6年度事業報告及び収支決算、令和7年度事業計画及び収支予算が決議され、令和7年度入会申込の正会員として、豊島区立熊谷守一美術館、公益財団法人ギャラリーエー

クワッド、佐賀大学美術館、軽井沢安東美術館、やないづ町立斎藤清美術館、東御市梅野記念絵画館・ふれあい館、NISSHA 印刷歴史館の7館、個人会員6名が新たに承認されましたが、正会員4館、個人会員3名の退会があり、正会員が419館、個人会員53名となりました。賛助会員については、株式会社アルテ舎、公益財団法人三菱財団、ブルームバーグ・コネクツ、株式会社The Chain Museumの4団体の入会と2団体の退会の報告があり、65団体となりました。

社員総会に続き同所において、特別行事として、山出淳也氏(Yamaide Art Office 株式会社代表取締役)による特別講演会「大分県における現代アートを活かした地域振興」が行われ、温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点として2005年4月にNPO法人BEPPU PROJECTが発足して以来、現代芸術の紹介や普及、フェスティバルの開催や地域性を活かした企画の立案、人材育成、地域情報の発信や商品開発、ハード整備など、様々な事業を通じてアートが持つ可能性の普遍化を目指し、アートを活用した魅力ある地域づくりへの取り組みなどをお話いただきました。また、特別行事後に大分県立美術館で開催中の「LINKS -大分と、世界と。」展の観覧が行われ、その後、情報交換会会場(ホテル日航オアシスタワー)へ移動し、多くの方々の参加を得ることができました。

総会の準備と実施にご尽力いただきました大

分県立美術館をはじめご協力をいただきました大分県芸術文化スポーツ振興財団事務局の皆様に変更して御礼申し上げます。

第6回定時社員総会は、長野県立美術館を担当館とし、来年6月4日、5日に長野県長野市で開催予定です。詳細が決まりましたら改めてホームページ等で告知や連絡させていただきますので、今年と同様に多くの会員館の皆様の参加により、年に一度の社員総会が有意義になるようよろしくお願いいたします。

最後になりますが、全国美術館会議(以下、全美)が法人化されてから5年経過しました。法人化の当初はコロナ禍により活動が滞ることもあり

ましたが、会員の皆様のご尽力により活動が充実してきたと思っています。全美の活動は、定款にもある「美術館の使命を実現する活動を支援するため、活動の現場で培われる視点を重視しつつ美術館相互の連絡及び連携を図ることを目的とする。」を行うことです。それを支えるための運営基盤の充実などの課題は尽きませんが、前号で山梨事務局長からお願いしているように全美の活動について正会員館の職員の方々、特に若い世代の方々に積極的に研究部会へ参加していただき、人的交流と情報交換により、全美の活動基盤がより確かなものとなるようにご協力をお願いいたします。

## 専門委員会から

## 広報委員会から

広報委員 遊免寛子（ゆうめん ひろこ・兵庫県立美術館）

広報委員会はホームページの内容を点検し改善するホームページ担当と機関誌の企画・編集を行う機関誌担当の二つに分かれている。それぞれの最近の活動について報告する。

ホームページについては、いくつかの改定作業を行った。まず広報活動強化の一環としてトップページのデザインを変更し、現在は正会員しか見えない項目に鍵マークを付けて、一般閲覧者に向けて項目名だけでも公開できるように変更した。内容はログインが必要で正会員だけ見ることがができる。また現在は正会員しか閲覧できない内容についても個人会員と賛助会員にも制限の解除を本年度中に行うべく、どの程度の解除が可能か各委員会、研究部会へのヒアリングを実施する。トップページの下の方にある活動報告については、これま

での研究部会報告に加え、新たに委員会活動報告、総会や学芸員研修会の活動報告の二つを加え、それぞれ新しく変更された活動報告が表示されるようにし、見た目が変わることで、より見てもらえるように変更して、年度内に公開する予定である。なお、ログインの際のIDとパスワードは各館での管理となっているので、不明の場合は館内の担当者にご確認いただき、担当が不明の場合は事務局まで。

機関誌については『ZENBI』第27号を今年2月1日に発行した。第27号はブロック報告のほか、全美フォーラムに3編の原稿が寄せられ、各研究部会の部会報告、災害対策委員会、広報委員会、事務局からの報告に加えて賛助会員からの寄稿も掲載した。

## 「福島県立美術館 東日本大震災報告書」の刊行

災害対策委員 増淵鏡子（ますぶちきょうこ・福島県立美術館）

東日本大震災から13年が経過した2024年4月、ようやく福島県立美術館は震災報告書をまとめることができた。この報告書の作成については全国美術館会議から全面的な支援を受け、全国美術館会議の発行物として関係各所に配布していただいた。予算としては災害対策費に分類されるため、昨年度から新たに災害対策委員となった筆者がお礼とともどもここに一文ご報告することとなった。

思えば震災直後から、白紙になってしまった2011年度の展覧会事業について援助していただいたり、放射線測定器を購入していただいたり、全国美術館会議の存在は復興に向けての本当に大きな拠り所となった。ここにあらためて御礼申し上げる次第である。

当館は3月11日の地震で天井、壁などに少なからぬ被害があったが、設備関係者の尽力で比較的早い、4月末には再開している。当時の酒井哲朗館長は「日常性の回復」が最も災害時の美術館に求められているとして、一日も早い再開を目指した。「スタジオジブリレイアウト展」を開催中で、高線量によって外で遊べない多くの子供たちが足を運んでくれた。

東京電力福島第一原子力発電所から当館は60キロ距離がある。にもかかわらず「福島」という名前を冠する美術館だったせいか、県内の美術館の中でもとりわけ外部からのアプローチが多かった。国内外から、アーティストの支援申し

出、展覧会の提案、沿岸部でのワークショップのコーディネート依頼などが次々と当館に寄せられた。どれを受け、どれを断るか、議論に議論を重ね、2011年の事業は進んでいった。

また、本当にこれは偶然なのだが、当館ではアメリカの画家・ベン・シャーンが水爆実験で爆した第五福竜丸をテーマにした《ラッキードラゴン》シリーズ作品を所蔵している。そしてまた偶然にも震災の翌年にベン・シャーンの大回顧展を開催した。放射性物質による作品の汚染を恐れた海外の美術館から、当館への貸出が見送られたことは美術界の大きなニュースになった。

センセーショナルな話題の裏で、職員は館内外の放射線量をこつこつと測定し、安全を確認しながらデータをウェブサイトで公開し、信頼の回復に努めた。幸い館内の放射線量は低かったが、庭園の一部は高濃度の場所もあった。美術館の庭園の表土を剥き取り、地中に埋めて線量を低下させる「除染」工事も2012年から14年にかけて行われた。2020年には汚染土が掘り返され、双葉町・大熊町の中間貯蔵施設に運び込まれた。報告書には時系列での詳細な記録、客観的な数値データがまとめられている。原発事故被害にあった美術館として、世界でもあまり例のない報告だと思われる。

また一方で、放射能汚染の評価、避難をめぐるスタンスの違いは多分に主観的な問題をはらんでおり、深刻な分断を被災地にもたらした。美

術館内も一枚岩でないことは確かで、震災後には様々な意見があった。報告書では当時の館内スタッフから聞き取り調査を行い、一人一人が被災者として判断を迫られた様子を生々しく伝えている。

さて、なぜ報告書完成まで13年もかかったのか、言い訳のようになってしまいがお伝えしたい。まず、福島県の原発災害は今なお収束していない。放射線量がまだ高い、帰還困難区域に家がある人々は県内外で避難生活を続けている。そして、原発廃炉処理水の海洋放出は外交問題にも発展し、解決をみていない。さらに、「30年以内に県外で処理する」と法律で決められているものの、現在原発敷地付近の「中間貯蔵施設」に仮置きされたままの汚染土の問題がある。当館の敷地表土と同じく、県内一円の土が「除染」されて集められたものである。

なかなか区切りがつけにくい状況の上に、追い打ちをかけるような新たな災害が続いた。令和元年東日本台風で福島県は30人もの死者を出し、文化財の浸水被害も相次いだ。また東日本大震災の余震とされる2021年、2022年の2回の福島県沖地震は、それぞれ最大震度6強を記録して、2011年の地震を持ちこたえた古い蔵

などが多く倒壊した。県内各地のレスキュー対応に追われて時間が過ぎていった。

毎年のように災害が全国各地で起きている。現在も同じ令和元年台風で被災した川崎市市民ミュージアムや、能登半島地震の文化財レスキューが進行中である。東日本大震災の総括はまだまだ出来ないにしても、一旦振り返ってその経験を共有することが、未来に必ず訪れる災害に向けての準備となる。

この報告書を中心となって編集したのが、震災当時の学芸課長であった伊藤匡氏と、その後学芸課長・副館長となった荒木康子氏である（お二人とも全国美術館会議の個人会員）。特に荒木氏は定年退職された後にもかかわらず、毎日のように館に足を運んで当時の資料を整理し、スタッフに聞き取り調査をして密度の高い報告書を完成させた。編集作業には震災後に採用された若い学芸員も加えて、その経験を伝えるという大きなミッションも含まれていたように思う。筆者も一学芸員として東日本大震災を経験したが、発災から復興期にかけ、責任ある立場だったが、発災から復興期にかけ、責任ある立場だったが、二人がどれほど大きな重圧を背負っていたのかをあらためてかみしめている。偉大なる先輩に心からの敬意を表したい。



福島県立美術館  
東日本大震災報告書

『ZENBI』では、次の要領で広く  
皆さんからの原稿をお待ちしています。

**[原稿の内容]**

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

**[投稿の資格]**

- ・全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればあなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

**[投稿に係る詳細]**

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

**[締切]**

- ・第 29 号 (2026 年 2 月発行予定) については 10 月 31 日、  
第 30 号 (2026 年 8 月発行予定) に関しては 4 月 30 日を締切とします。(当日必着)

**[提出先]**

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)  
ikedai@kanazawa21.jp (池田)  
aoyama\_k@nmao.go.jp (青山)

**[問い合わせ先]**

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。  
〒 682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 2-3-12  
鳥取県立美術館  
(一社) 全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎  
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-24-5442

**1. 全般事項**

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
  - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
  - イ 全国美術館会議個人会員
  - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

**2. 投稿文の採否**

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは（一社）全国美術館会議広報委員会（以下「広報委員会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

**3. 原稿について**

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

**4. 校正について**

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

**5. 著作権について**

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は（一社）全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

**6. その他**

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

制定：平成 23 年 7 月 24 日  
改正：令和 4 年 1 月 31 日  
全国美術館会議広報委員会

## 編集後記

『ZENBI』の28号をお届けする。この数年、私たちは世界の籠が外れたような状況を目撃してきた。各地でなんら正義のない戦争が続発し、難民たちは狭い地域に閉じ込められて虐殺される。強い者が正しいような言説が流布し、弱い者は顧みられることがない。このような世界に異を唱えたのはエルサレムにおける村上春樹であった。「高く堅い壁とその前で壊れる卵のどちらを取るかと言えば、私はいつも卵の側に立つ。」

美術館に関わる者として、私はこの言葉に深く同意する。戦争の話ではない。近年、美術館の一つの趨勢として、弱者への配慮が明瞭に認められることだ。私たちは広く開かれた美術館を標榜しながらも、例えば障がい者、乳児連れ、子どもたちに対して門を閉ざしていたのではないだろうか。最近話題になっている「合理的配慮」の問題については、いずれどなたかに全美フォーラムで論じていただきたいと考えているが、美術館は卵の前に立ちどかる壁で

あってはならない。

ブロック報告については毎号、執筆者から意欲的なレポートを寄せていただき、感謝している。地域や時期によってはブロック全体を包括的に報告する記事を執筆することが困難であることは十分に承知している。これまでも話題や地域を限定することによってこの難題に対応したいくつもの原稿を掲載してきた。今回のブロック報告の中にも必ずしも当該地域における美術館や展覧会に触れていない内容の記事がある。しかしその地域ゆかりの作家について検証することはとりわけ地方の美術館にとっては重要な役割であり、必ずしも紹介される地域に拘泥する必要はないだろう。逆に言えば地域の美術館や展覧会について論じる方法は多様であるはずだ。本務のかたわら、力が入ったレポートをお寄せいただく執筆者のみなさまにあらためて深い感謝を記すとともに、今後も様々な可能性を秘めた報告を期待している。(O)

## IPMを取り入れた保存環境づくりと虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



### 公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F  
TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp

## 賛助会員、 個人会員の皆さまへ

「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募っています。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。

同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会準備を進めているところです。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

広報委員会

よりよい、つよく、ささえる。

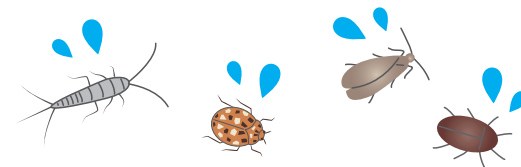
**IKARI**



## エコミュアー FTプレート

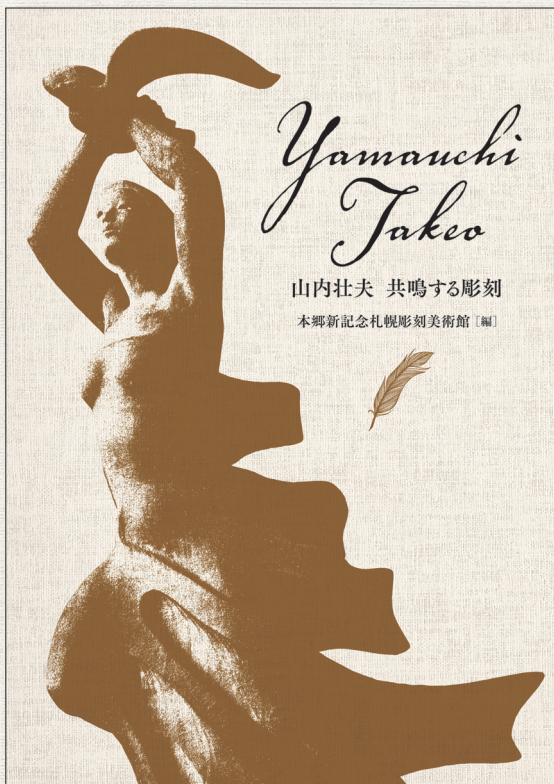
文化財虫菌害  
防除薬剤認定  
第26号

イカリ消毒オリジナルの蒸散タイプの防虫剤。  
人体への安全性が高く、少量で効果を発揮します。  
効果はなが〜1年間。  
迷惑な文化財害虫を撃退します。



## イカリ消毒株式会社 <https://www.ikari.co.jp>

本 社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405  
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720



## 『山内壮夫 共鳴する彫刻』

好評発売中

A5版(21.0×14.8cm)、182頁、定価 2,200円(税込)

編集:本郷新記念札幌彫刻美術館

書店、Amazonほか電子書籍も販売しております。

NAKANISHI PUBLISHING CO.,LTD.  
中西出版株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号  
TEL.(011)785-0737 FAX(011)781-7516  
URL:https://nakanishi-shuppan.co.jp  
E-mail:owl@nakanishi-shuppan.co.jp



### [展覧会情報]

## 没後50年 山内壮夫展

会期/2025.6.14.Sat-9.28.Sun

休館日/月曜日 ※ただし月曜祝日の場合開館し、火曜日休館

開館時間/午前10時~午後5時(最終入館は午後4時30分まで)

主催/本郷新記念札幌彫刻美術館(札幌市芸術文化財団)

助成/札幌市芸術振興財団 公益財団法人花王芸術・科学財団 公益財団法人朝日新聞文化財団

後援/北海道、札幌市、札幌市教育委員会 協力/(株)佐藤総合計画、(株)水野眼鏡店

北海道出身の彫刻家・山内壮夫に関する  
初の体系的書物として発刊する「没後50年 山内壮夫展」公式図録。  
作品の図版、モニュメント一覧、年譜、新しい論考6本を掲載。

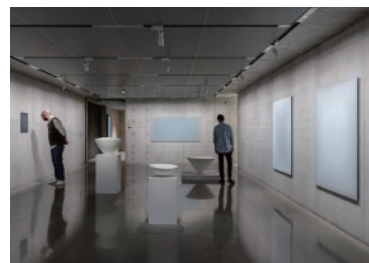
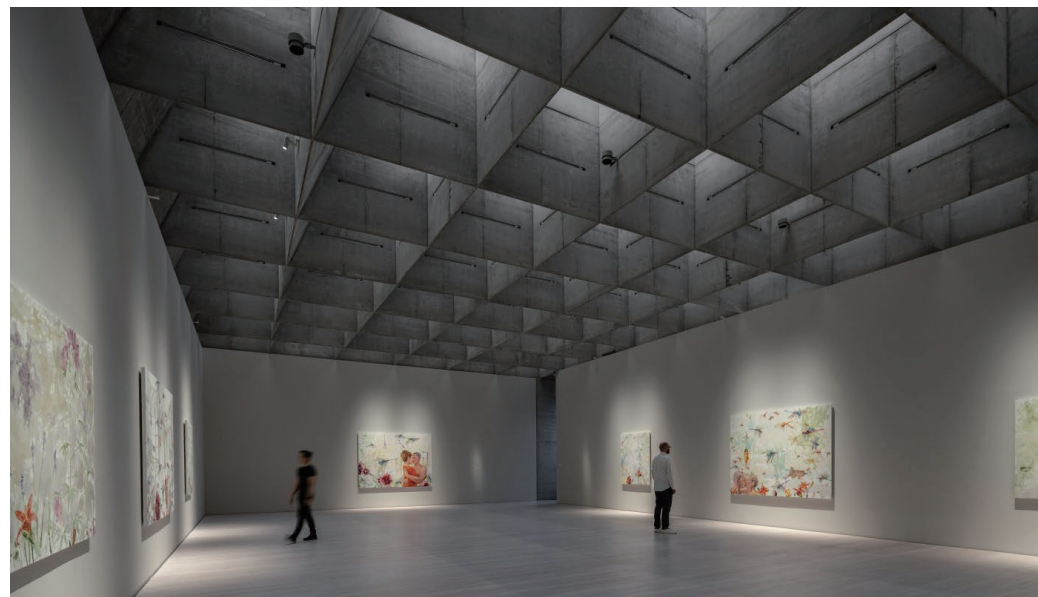


# 「知る人ぞ知る」 山内壮夫の作品と生涯を紐解く

# ERCO

## ERCO, the Light Factory. Architectural lighting

ドイツのエルコ社(ERCO)は、LED技術を用いた建築用照明器具の国際的リーディングカンパニーです。1934年に設立され、1960年代にはヨーロッパにおける建築照明のパイオニアとなりました。現在、世界約55カ国に営業拠点およびパートナーネットワークがあり、約1,000名のERCOスタッフが、持続可能な照明器具の開発と発展に取り組んでいます。



### Optec - あらゆる空間に対応するスポットライト

オプテック(Optec)は、どのような用途にも対応します。さまざまな器具サイズと、バリエーション豊かな配光の組み合わせは、ハイコントラストのアクセント照明から展示物への投光照明、壁面をムラなく均一に照射したり、印象的な効果をもたらす鋭いビーム照射も可能とし、美術館や博物館、ギャラリー等の照明設計に最も適したスポットライトです。

Optecなら、照明のあらゆるニーズへの対応が可能です。革新的な光学設計により、効率性と快適性を兼ね備えています。灯体と電源ボックスが分離した器具のデザインは、完璧で優れた熱管理システムと性能を確保すると同時に、直方体と円筒の組み合わせがシンプルかつコンパクトでクラシックな視覚的印象を作り出しています。

## Light & Licht

ERCO リプレゼンタティブ パートナー  
ライトアンドリヒト株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2-5-10  
Tel.: 03-5418-8230(代表)  
E-mail: info.jp@lightandlicht.com



Design and application:  
www.erco.com/optec

QRコードよりOptec  
スポットライトの情報が  
ご覧いただけます。  
(英語サイト)